

19世紀後半ベルギー北部地域における地域・国民意識の形成 -フランドレン主義文化団体の「競働性」-

メタデータ	言語: ja 出版者: 駿台史学会 公開日: 2023-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣田, 梨紗 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000164

【研究ノート】

19世紀後半ベルギー北部地域における 地域・国民意識の形成

—フランドレン主義文化団体の「競争性」—

廣 田 梨 紗

要旨 本稿は、1860年代から1880年代にかけて発展したベルギー・フランドレン運動の史的展開を国民論の観点から検討する。特に運動を主導したウィレムス基金とダヴィッド基金の活動に注目し、年報史料から各党派の指導者達がどのように地域・国民意識形成を目指したのかを歴史的に明らかにする。

ベルギー建国当初、「ベルギー」概念も「フランドレン」概念も決して自明ではなかった。19世紀のフランドレン運動は、言語的平等の要求に加え、フランドレン全体での地域意識形成を目指した。しかし、そのプロセスは党派ごとに異なる。本稿が扱う二つの文化団体は、各々自由主義派、カトリック派に属しながら、フランドレン地域意識を競い合って追求した。つまり、両団体を取り上げることで、フランドレン運動内部における党派間の「競争的協働関係」を浮き彫りにすることができる。

19世紀半ばのベルギーではブルジョワ・地主層に政治権力が集中した自由主義国家体制が成立しており、急速な産業化により階級間・地域間格差に基づく様々な社会問題が引き起こされた。これに対処するため、カトリック・社会主義勢力は各々社会集団を構想していき、都市中間層に限定されていたフランドレン運動も拡張をめざした。その文化的中核となったのがウィレムス基金とダヴィッド基金である。両団体には党派を超えた共通点が存在した。第一に、会員層が言語問題を多様な社会問題と関連付けて語るようになった点である。言語問題を階級間の利害から地域間の利害へと読み替えて運動の拡張をはかったのである。第二に、会員層がロマン主義の影響を受け、理想化された「フランドレン都市・農村」のイメージを形成した点である。フランドレン主義者は構築された「フランドレン性」をベルギーの特徴と読み替え、フランス語文化と対置しようと主張することで、国内でのフランドレン運動の存在意義を高めた。一方、両団体の間にはフランドレン主義実現のための論理の相違がみられた。自由主義系ウィレムス基金は世俗的公権力による社会問題解決を主眼におき、啓蒙主義的教育を大衆に施して近代の自律的市民育成をめざした。一方、カトリック系ダヴィッド基金はキリスト教社会運動の一翼を担い、教会権力による社会問題解決も想定していた。そして、中世の有機体的農村像を引き継ぐと考えたフランドレン地域をベルギーの重要要素とし、聖職者による恩顧主義的教育を通じた有機的人民の育成をめざした。すなわち、フランドレン運動で自由主義・カトリック派は「言語的平等の実現」という共通目標を掲げつつ、それぞれの論理で地域社会と結びついていたといえよう。

キーワード：ベルギー、フランドレン、国民主義、文化団体

はじめに

問題の所在

本稿の目的は、帝国主義列強の狭間でベルギーがその国際的地位の安定をはかった19世紀後半、北部フランデレン地域のフランデレン運動の指導者達がどのように地域・国民意識形成を目指したのかについて歴史的に明らかにすることである。その際、フランデレン運動が様々な社会層に広がる前提条件を整えた1860-1880年代に焦点をあて、運動を主導した二つのフランデレン主義文化団体の活動を中心に分析する。一つは自由主義系のフランデレン主義文化団体のウィレムス基金（Willemsfonds, 1851-）であり、もう一つはカトリック系のフランデレン主義文化団体のダヴィッド基金（Davidsfonds, 1875-）である。

ベルギーは大国間の緩衝地帯として生み出された特異な建国事情をもつ多言語・多文化国家であり、その内部は言語、階級、宗教などの様々な要素が複雑に絡み合い、ときに激しい対立も生んできた。特に言語は、実際に話されている地域と結びつき、建国以来現在に至るまでこの国を大きく二分してきた。現在、北部フランデレン地域ではオランダ語（＝ネーデルラント語）が、南部ワロニー地域ではフランス語が、首都ブリュッセル地域ではオランダ語とフランス語の両方が公用語とされている。また、東部の一地域にはドイツ語圏も存在する。このような多言語状況にあるベルギーにおいて長年言語対立の中心にあったのがフランデレン運動である。

フランデレン運動とは概して、ベルギー建国当初のフランス語のみが公用語化された体制に対して、北部フランデレン地域でネーデルラント語の地位向上、言語的平等をめざして展開されるようになった運動をいう。その際、注意すべきは、現在用いられる意味での「ベルギー（Belgique/België）」や「フランデレン（Vlaanderen）」という領域概念は、ベルギーが建国された当時は新しいものであったということである。元々「ベルギー」は一般的に低地諸国全域を指す用語であり、近代的な意味で用いられるようになるのは1789年のブラバント革命以降であった⁽¹⁾。一方、「フランデレン」はかつてのフランドル伯領⁽²⁾を指す用語であり、ベルギー国家誕生当時でも東西フランデレン2州のみを指していたにすぎない。したがって、北部地域で上記2州以外のブラバント州、リンブルフ州、アントウェルペン州の住民はフランデレン地域全体としてよりもむしろ州レベルの地域意識を強く持っていたといわれる⁽³⁾。このように、ベルギー建国後まもない1830年代においては、「ベルギー」という国家概念も「フランデレン」という地域概念も決して自明ではなかったと考えられる。こうした状況において、初期フランデレン運動は、言語の平等を要求することに加えて、フランデレン全体での地域意識を形成することを目指したのである⁽⁴⁾。しかしながらそのプロセスは政治党派ごとに異なり、単線的にとらえられるものではない。比較政治学を筆頭に様々な学問領域で19世紀後半以降のベルギー

は「柱状化社会⁽⁵⁾」であったとしばしば語られる。すなわち、ベルギー社会は宗教や経済をめぐる世界観の違いを基礎とした複数の部分社会(=「柱(zuil)」)からなるという考え方である⁽⁶⁾。柱は政党から労働組合、報道機関、学校、教会、合唱団といった様々な団体を包摂し、社会領域全般にわたるネットワーク化がなされたという。フランデレン運動もまたこうした「柱状化」と呼ばれる社会勢力の組織化と並行する形で拡大していったとされる。本稿では、こうした議論を踏まえつつ、各社会勢力が運動を展開する中で政策決定や人的交流を通して相互に影響しあっていた側面に光をあてたい⁽⁷⁾。本稿で取り上げるウィレムス基金やダヴィッド基金は1850年代から1870年代にかけて設立され、ともにフランデレン地域全体での組織化を目指した文化団体である。両団体の指導者層はそれぞれの考え方で「フランデレン地域意識」形成を試みたと考えられる。

先行研究

ここで、フランデレン運動をめぐる研究動向を概観する。ベルギーで連邦制導入が押し進められた1960年代以降、「小国」民主主義モデルに対する関心が高まるなかで、フランデレン運動史は主として政治学や社会言語学の領域で言語問題史と捉えられることが多かった⁽⁸⁾。これらの研究ではフランデレン運動の展開がベルギー中央政府による言語政策のアプローチを変化させた過程を分析し、運動とベルギーにおける統治機構再編の相関性を明らかにした。しかし、これらの研究は政治体制や言語政策に着目するあまり、フランデレン運動が単に言語問題だけでなく、政治・経済・社会の問題も重視していた点を看過してきたといえよう。そのため、19世紀ヨーロッパに共通して論じられる国民化の問題が後背に退けられたのである。そこで、本稿ではフランデレン運動史を国民論の観点から捉えなおすことをめざす。その際、中東欧の国民主義研究で知られるフロツホの研究が参考になる。フロツホは、ベルギーを含むヨーロッパの小規模国民を複数取り上げ、経済発展および国民主義の担い手という指標を用いながら、国民主義の展開パターンを比較検討した⁽⁹⁾。彼によると、国民運動の目的、社会的動因、構造は時の経過とともに変化するものであり、以下の3つの段階に区分することができるという⁽¹⁰⁾。すなわち、フェーズAは学問的関心が高まる時期にあたり、一部の文筆家が国民の言語や風俗に関心を持ち、それに対する研究を深めていくとされる。続くフェーズBは政治的主張が始まる時期で、一定の社会階層や職業層に属する「愛郷者」たちが様々な組織を通じて体系的に宣伝を行うという。最後にフェーズCは、国民主義が大衆へと浸透する時期であり、国民的要求を掲げて闘争に幅広い階級の人間が動員されていくとされている。

フロツホは上記の議論の中で、フランデレン運動をなかなか統合が進まず、一般大衆にまで影響が及ぶのに時間を要した国民運動の事例として取り上げている。それでは、フランデレン運動はどのように展開したのか、フロツホによる国民運動展開の三段階論を当てはめてみよう。

表1はフランデレン運動の展開を政治・経済的背景と併せてまとめたものである。すなわち、ベルギー独立直後の1830年から1840年にかけて(=期間Ⅰ)は、一部の文学者がフランデレンの言語や民族的な習俗等に関心を持ち、それに対する研究を深めていった時期であり、フロッホがいうところのフェーズAの学問的関心の時期にあたる。続く1840年から1850年にかけて(=期間Ⅱ)は、オランダによる独立の承認を背景に、それまで以上に政治的主張が強まった時期である。ちょうど知識人層が各地で大小さまざまな文化団体や学生団体を組織していった点に注目するなら、フロッホのいうフェーズBに相応するとみてよい。その過程でフランデレン運動の指導者達は議会への請願の提出を通してフランス語とネーデルラント語の両方を政策対象とする「二言語主義」の実質化を訴えていった。そして1850年から1880年代にかけて(=期間Ⅲ)は、各地方・都市レベルの活動が主だったフランデレン運動が、各陣営内で地域全体を対象とする大規模な文化団体によって担われるようになった時期である。これは、後述するように自由主義派とカトリック派の「統一同盟」が崩壊した後に政党政治が本格化する時期とも重なる。すなわち、フロッホの論に従えば、フェーズBからフェーズCへの過渡期といえる。ただし、この間のフランデレン運動の展開は決して一様ではなかった。1840年代半ばの飢饉によってフランデレン農村地域が大打撃をうけたことを背景に、当初は「統一同盟」内閣が設置した委員会を通してフランデレン主義者は不満を政府に訴えようと試みた。しかし、自由党内閣が復活してこの動きが頓挫した後は、選挙運動を通して議会での法律制定をめざす

表1 フランデレン運動の時代区分

	1830年	1840年	1850年	1860年	1870年	1880年	1890年
政権政党		統一同盟	自由党 統一同盟	自由党	カトリック派	自由党	カトリック党
言語政策	単一言語主義(フランス語)				二言語主義(フランス語とネーデルラント語)		
経済	保護貿易主義 重工業への集中投資 北部は零細小作農業・家内工業残存	不作・飢饉 伝染病流行 経済危機	⇒不況対策のなかで自由貿易運動盛んに	自由貿易主義確立 輸出産業として 重工業発達	大不況	⇒自由貿易主義維持 鉄鋼・機械工業に加えて化学工業発達 海外から安価な穀物流入、農村に打撃	
フランデレン運動	期間Ⅰ 文学者間での学問的関心の高まり	期間Ⅱ 請願運動	苦情委員会 を通じた訴え ⇒失敗	期間Ⅲ 選挙運動及び議会での政治活動中心 自由主義派優勢 → カトリック派優勢		期間Ⅳ 運動が一般大衆へ拡大	
	1839年オランダ、ベルギー独立を承認	1846年自由党設立 1848年二月革命	1851年ウィレムス基金設立		1875年ダウイド基金設立	1884年初のカトリック政党成立 1885年ベルギー労働党設立	1893年選挙法改正により男性普通選挙実現

活動にシフトしていく。その過程で議会の勢力関係はフランデレン運動にも反映される。その結果、1860年代に運動を主導してきた自由主義派の影響力が後退し、かわってカトリック党が政権を奪取すると、1880年代以降はカトリック派の勢いが勝るようになった。最後に、1890年代から世紀転換期にかけて（＝期間Ⅳ）の時期は普通選挙運動が活発化し、それと並行する形でフランデレン運動が徐々に一般大衆まで広まったと考えられる。その担い手であるフランデレン主義文化団体においても、会員数の爆発的な増加がみられるようになるなど、フロッホでいうところのフェーズCの時期に相当するとみていい。すなわち、本稿で扱う1860年代から1880年代は期間Ⅲに該当し、この期間はフランデレン運動が各地方の知識人間の運動から全フランデレンを対象とする運動、ベルギー社会を揺るがす大衆社会運動へと拡張をはかった重要な転換期にあると考えられる。

以上のフロッホの研究では、19世紀半ば以降のフランデレン運動の担い手の社会的位相を複数のフランデレン主義団体の統計を用いて分析している。その中でもウィレムス基金とダヴィッド基金（及びその母体ともいえる「時間をかけて、勤勉に（Met Tijd en Flijt）」）は、地域横断的に活動を広げ、長期にわたって影響力を維持し続けたためにフランデレン運動の拡大に寄与した重要な組織として取り上げている⁽¹¹⁾。二つの団体について、それぞれの団体に所属するフランデレン出身の歴史家によって団体全体の歴史が詳細に研究されてきた。『新フランデレン運動百科事典』や運動に関する史料集の編纂に携わるなどフランデレン運動史研究の第一人者でかつカトリック党の黨員でもあるヴィルス（Lode Wils）は、1977年から1989年にかけて、ベルギー建国直後から第二次世界大戦後までのフランデレン運動の通史研究を3巻にわたり発表した⁽¹²⁾。この研究はダヴィッド基金の運動への貢献に焦点を当てたものであり、ヴィルスはアーカイブ研究に基づき自由主義派とカトリック派の抗争など政治世界と団体の関係性を明らかにしている。フランデレン運動の原動力となっているのはダヴィッド基金に代表されるカトリック派で、自由主義派や社会主義勢力の影響力は小さいという考えが本研究の根底にある⁽¹³⁾。一方、自由主義派の歴史家で、ウィレムス基金の執行部メンバーにもなったフェルヒュルスト（Adriaan Verhulst）やプレヴェニール（Walter Prevenier）、ボッツ（Marcel Bots）らは、1982年にベルギーやフランデレンにおける自由主義運動に関する史資料を保管するリベラル・アーカイブ（Liberaal Archief, 現 Liberas）を設立した。ここにはウィレムス基金のパンフレットや写真、ポスター、執行部メンバーが記した書簡等、団体にまつわる史資料が多数所蔵され、ボッツによる1993年の研究のような大衆教育、出版といった団体の活動内容や団体生活についての詳細な分析を可能にした⁽¹⁴⁾。しかし、双方の研究は団体活動の詳細な分析から各陣営内で団体がフランデレン運動全体へどのように貢献したのかを検討しているものの、二つの団体の活動内容とそのイデオロギー的基盤を比較検討するまで至っているとは言い難い。そこで、本稿ではこれらの研究からさらに踏み込んで、自由主義派とカトリック

派が政治抗争を繰り返した19世紀後半、ウィレムス基金とダヴィッド基金の会員がどのように地域・国民意識形成をめざしたのかを分析する。その際、「競働性」という造語を用いて考えたい。なぜなら、結論を先に述べれば、彼らはフランデレンという地域意識を競い合って追求していたと考えられるからである。本稿では、両者の間には対立性を止揚した「競争的協働関係」があったことを示すとともに、その歴史的特徴を明らかにしていきたい。

本稿では、『ウィレムス基金年報』(*Jaarboek van Willems-Fonds*)と『ダヴィッド基金年報』(*Jaarboek van Davids-Fonds*)を主要な史料として用いる。『年報』は前半部に団体全体および支部の運営報告を収録しており、後半部は会員からの寄稿で構成されている。先行研究では団体の活動内容を把握するために前半部の運営報告はたびたび用いられているが、後半部の寄稿を主たる分析の対象とした研究は管見の限り少ない。しかし、寄稿は小説や詩、歌謡から講演録、評論文など多様なジャンルにおよび、扱われるテーマも言語問題に限らず、科学、産業など多岐にわたっている。そのため、運動指導者層とも重なる文化団体会員の社会問題への関心を捉え、彼らのフランデレン観・ベルギー観を社会的状況と関連付けて分析する上で有効な多角的視座を提供していると考えられる。

1. フランデレン運動発達の史的背景

産業化の進展とブルジョワ自由主義体制

まずは、1860年代から1880年代にかけてのベルギー社会の特徴を政治的側面からみていこう。ここで、少し遡ってベルギー建国以降の政治体制の変化を簡単に整理する。ベルギーは1830年にオランダからの独立を宣言したが、新興ベルギーの国家体制の特徴は主として2点挙げられる。1点目は、自由主義派とカトリック派の間で「統一同盟 (unionisme)」と呼ばれる協調関係が結ばれたということである。自由主義派は国家を世俗化して宗教権力から解放することを目指したのに対し、カトリック派は政治権力の教会への干渉を警戒して地方自治の維持を目指していたが、理念上の壁をこえて憲法、統治形態、社会秩序についての合意を基に協調が維持されていた⁽¹⁵⁾。2点目は、制限選挙に基づく議会制民主主義がとられたということである。当時の選挙は納税額等に基づく制限選挙であり⁽¹⁶⁾、有権者数は全人口の1%ほどにすぎなかった⁽¹⁷⁾。すなわち、新興ベルギーの国家建設は早期の産業革命達成に支えられ、主としてリベラルなフランス語系ブルジョワジーや地主層によって進められたのである。彼らはフランス語を事実上唯一の公用語とする言語政策を展開していき、フランデレン地域では大半を占めるフランデレン語のみを話す中・下層市民は政治的意見の表出方法をほとんど持たなかった。その後、産業の発展とともに議会で自由主義派の勢力が次第に拡大していき、1846年に自由主義者はカトリック派に先駆けて自由党を結党し、翌年の国政選挙で自由党は勝利を収めた。これにより「統一同盟」は崩壊し、19世紀後半に入るとベルギーは自由主義・カトリック陣

営間の対立を軸とした政党政治の時代へ突入していく。

とりわけ1860年代以降、自由党政権は成長産業であるワロニー地域の製鉄・機械工業の市場を海外に求めて、関税を撤廃し、各国との通商条約を締結するなど自由主義的経済政策を積極的に展開した他、急進的な教育の世俗化政策⁽¹⁸⁾を推進した。しかし、前者は家族労働によって零細小作経営や家内制手工業が営まれるフランデレン農村地域を低迷させ⁽¹⁹⁾、農民層の不満が高まった。また、後者はカトリック教会の教育権の保証を要求するカトリック派の激しい反発を引き起こした。こうして、自由党政権の諸政策がもたらした社会問題に対応する形でカトリック勢力と社会主義勢力の団結が進められていく。カトリック派は党内対立のため選挙で振るわなかった自由党に代わり、1870年から1878年にかけて内閣を組閣した。その後自由党政権が復活したものの、1884年には初めてのカトリック政党「カトリック・サークル＝保守同盟連合」を結党して再び政権を奪取した。これ以降、第一次世界大戦勃発までの30年間、カトリック党が政権を担うことになる。また、社会主義勢力でも1870年代に各地で労働組合、消費者協同組合、相互扶助団体などの組織が形成されていき、1885年に全国の労働者組織諸勢力が統合した「ベルギー労働党」が結党した。さらに、これに呼応するかのようフランデレン運動もそれぞれの政治勢力と結びつく形で発達していくのである。

ベルギー社会における分断とフランデレン運動の展開

フランデレン運動は独立とはほぼ時を同じくして起こったものの、19世紀半ば頃までの運動の担い手は下級聖職者や専門職、中等学校教師、官吏など、主に都市出身の知識人階級であった。フランデレン社会のなかでもフランス語に精通していた高位聖職者や上層市民の大半はフランデレン運動に与しなかった他、工場労働者や農民といった一般大衆まで運動は広がっておらず、農村部の参加者は初等学校教師などに限定されていた。1860年代以降、フランデレン運動の指導者は自由党政権の政策がもたらした社会問題に対処し、地域間格差の是正を要求しながら、運動の拡大を試みていく。

ベルギー社会には国民統合の「障害」となる様々な分断の断層が存在するが、その中で言語の多様性はフランデレン運動の発展と密接に結びついている。ここで注意すべきは、独立当初、ベルギー全体はもちろん、フランデレン地域においても言語の統一性など存在せず、言語境界線は現在のような地理的な境界線ではなく、社会階層的な境界線であったということである⁽²⁰⁾。フランデレン地域の一般大衆は地域ごとに多様なフランデレン語を話し、南北に散在するわずかなエリート層のみがフランス語を話すという言語状況だった。そのため、ブルジョワエリート層によるフランス語単一言語主義政策は、使用言語に基づく社会格差を拡大、固定化させた。例えば、教育分野で言語間格差は顕著であった。家内制手工業を基盤としたフランデレン経済が児童労働を助長していたこともあり、フランデレン地域はワロニー地域と比べて

識字率が低い傾向があった⁽²¹⁾。とりわけ、専らフランス語のみで行われていた中等教育レベル以上で格差は深刻であった。中等教育以上の教育をうけることは中産階級に加わる入口にもなっていたが、フランス語を理解しないフランデレン地域の一般大衆は圧倒的に不利な状況にあったのである⁽²²⁾。労働分野においても、言語格差がみられた。19世紀半ばの急速な産業化の進展に伴い、経営管理に関わる職や事務職といったホワイトカラーの業種が増加していった。その際これらの業種では人材の配置においてフランス語能力が重視されるようになり⁽²³⁾、それまで以上にフランデレン語話者に負担が課されるようになったのである⁽²⁴⁾。このように、フランデレンの人々は社会の様々な場面で言語的屬性に基づく差別的待遇を認識するようになった。フランデレン運動はこうした差別意識の先鋭化を背景に、言語による不平等を是正しようという要求を掲げて拡大を図っていく。しかしながら、上述のように19世紀半ばには言語の違いは階級差と結びついていたため、言語問題はフランデレン地域全体に共有されるものではなかった。また、歴史的に州・都市単位での強い地域主義が育まれてきたため、フランデレン主義陣営内でも利害が対立していた。フロッホはこうした分裂する要素あったからこそフランデレン運動が大衆運動へと拡大するのに時間を要したと主張している⁽²⁵⁾。

それでは、主に中間知識人層からなる指導者たちは運動の拡大をどのように図ったのか。その際重要なのは、栗原福也も指摘するように、運動拡大の過程で各党派の下で文化団体が設立され、一般大衆に向けて運動の意義を宣伝するのに貢献したということである⁽²⁶⁾。次章では、ウィレムス基金とダヴィッド基金という著名なフランデレン主義文化団体をとりあげ、その活動がどのようにフランデレン運動の拡大に影響を与えたのか分析していく。

2. 競い合うフランデレン主義文化団体

都市型の自由主義文化団体・ウィレムス基金

(設立経緯)

「フランデレン運動の父」として知られる、初期フランデレン運動指導者の代表的人物ウィレムス (Jan Frans Willems) の名を冠するウィレムス基金は、1851年2月23日、ヘントに創設された。同団体はスネラールト (Ferdinand Augustijn Snellaert) やプロマルト (Philip M. Blommaert) などかつて1840年代に請願運動を率いた自由主義的な初期フランデレン運動指導者が中心となって創設された。その一方で、創設メンバーには自由主義派とカトリック派双方を含んでいた。ウィレムス基金は設立当初、政治的に中立な団体であることを標榜していたが、1862年に急進的な反教権主義者のヴァイルステケ (Julius Vuylsteke) が執行部役員に就任して以降⁽²⁷⁾、団体の反教権主義・自由主義路線が明確化していく。その過程でヴァイルステケは、図書館を設立し、各地に支部を置いて活動の幅を広げていった。こうしてウィレムス基金は、ヘントに拠点を置く小さな言語愛好家サークルからフランデレン地域全体に広がる

「フランデレン住民」のための組織へと発展していったのである。活動範囲の拡大に伴って会員数も増加する。1851年の団体創設時には38人、その10年後の1861年になっても184人とどまっていた。しかし、ヴァイルステケが団体の運営を率いるようになった1862年以降は徐々に増え続け、1884年には4544人まで急増した。これは19世紀の間では会員数のピークである⁽²⁸⁾。しかしながら、団体が自由主義路線を明確にしたことで、1870年代にカトリック派会員の離反を招くことになり、フランデレン運動の主導権も、後述するカトリック系のダヴィッド基金に譲り渡すこととなる。低迷期に入ったウィレムス基金の指導者層は、ダヴィッド基金の教権主義的態度が自由主義者の参加を阻んでいると批判して⁽²⁹⁾、急速に拡大するダヴィッド基金に対抗した団体運営を展開していく。

(組織編制)

ウィレムス基金の設立目的は規約第1条に以下のように掲げられている。

ウィレムス基金はベルギーにおける一般の国民精神を強化するために、ネーデルラント語の研究と使用の奨励と、フランデレン住民の知的かつ道徳上の発達に貢献するあらゆる事柄の促進のために設立された⁽³⁰⁾。

すなわち、第一にネーデルラント語をフランデレン地域の住民に普及させること、そしてそれによりベルギー国民としての国民精神を強化することであった。ここで注意すべきは、規約ではウィレムス基金の活動の対象を「フランデレン地域の住民」と幅広く設定していることである。それでは、ウィレムス基金がいかにしてフランデレンの一般大衆に向けてネーデルラント語を、そしてフランデレン運動の意義を広めていこうとしたのか、団体の組織編制と運営のあり方についてみていこう。

ウィレムス基金では本部ヘントに執行部が置かれ、この執行部が団体全体の運営方針や予算配分などを決定する他、書籍の出版も担当していた。執行部メンバーは毎年各地の会員が集まって開かれる総会で選出された。一方、各地に地方支部が置かれたが、地方支部にもそれぞれ執行部が置かれた。主な活動は、ホールや図書館等の施設の整備・運営に加え、講演会や連続講義などといった独自のイベント企画であった。ウィレムス基金の場合、ヘント(1868年)にはじまり、アントウェルペン(1871年)、ブルッヘ(1872年)、ブリュッセル(1873年)、リール(1873年)、メヘレン(1874年)など基本的に都市部から支部が置かれていき、徐々に都市郊外にも支部が置かれるようになった。とはいえ、後述のダヴィッド基金と比べると、支部は都市部に集中している傾向があった。また、ライデン大学(1887年)やフローニンゲン大学(1888年)の学生支部など、少数ながらオランダにも支部が置かれた。これは、ベルギー国民意識に

においてカトリック信仰を重視していたダヴィッド基金に対して、自由主義派はフランス語文化に対抗するためにオランダとの文化的結びつきを重視していたことが影響しているといえるだろう。

また、ウィレムス基金は各地のフランデレン主義団体、自由主義団体、カトリック団体、労働運動組織、その他の中小文化団体との協働関係のもとで運営されていた。各地域のフランデレン主義団体もウィレムス基金に所属し、ウィレムス基金はフランデレン主義文化団体の上部組織として機能していたのである。地方支部のレベルでみると、ウィレムス基金と各種組織との間には共通する会員が多くみられた。一例を挙げれば、ブルッヘ支部の設立を主導したサブベ (Julius Sabbe) は 1870 年代半ばから 1890 年代末にかけて様々な団体の設立に関与していった。その射程は広く、労働者協会の「ファン・ヘルウェ協会 (Van Gheluwe's Genootschap, 1876 年設立)」や、フランデレン人向けの自由主義協会の「自由主義フランデレン同盟 (Liberale Vlaamsche Bond, 1878 年設立)」、あるいはブルッヘの観光振興を目的とした「ブルッヘ・ニュルンベルク会 (Kring Brugge-Nürnberg, 1883 年設立)」などの設立に関わった。これらの団体とウィレムス基金との関係は深く、講演会等イベントを協働して開催したり、相互に資金援助を行ったりすることもあった⁽³¹⁾。

このように、ウィレムス基金は地方支部の活動の充実をはかったり、各地の諸団体と密接に連携をとったりすることで、地域に根ざした活動を実現し、規模の拡大をめざしたのである。それでは、実際にウィレムス基金の活動はどの程度浸透していたのだろうか。

表 2 はウィレムス基金の会員構成を示している。ここから、ブルジョワジーや小ブルジョワジー、専門職、官吏、教師の割合が高いことがわかる。1860 年以降は、ギムナジウム以外の教師、すなわち初等学校教師が増加していった。その一方で、農民層や労働者層の割合は極めて低いこともわかる。ウィレムス基金の会員は最低 5 フラン⁽³²⁾を毎年寄付することになっていたが、この額は農民層や労働者層にとって高い費用だったのである⁽³³⁾。つまり、ウィレムス基金の会員は主として都市の中間知識人層に限定されていた。会員構成から分析すると、ウィレムス基金はヘントからフランデレン地域の各都市へと活動の範囲を地理的に拡張することができたものの、1860 年代末までに活動を一般大衆にまで浸透させることはできなかったということになる。

(活動内容)

ウィレムス基金の活動内容は主に以下の 5 つがあげられる。

第一に、学生向けの母語 (= ネーデルラント語) 研究・修練の奨励である。特に、中等教育や高等教育の学生向けにコンテストを開催したり、本の寄贈を行ったりして、ネーデルラント語の普及を目指す活動が盛んであった。表 2 にあるように、ウィレムス基金の会員のうち学生

表2 ヴィレムス基金の会員構成 (%)

	1852	1857	1862	1865-6	1868
地主、高級官吏	9	7.5	9.5	4.5	4.5
1. 商人	2	4	3.5	2.5	5.5
2. 職人	-	3.5	7	5.5	5
3. 企業家	2	3	2.5	9	7.5
4. 書籍販売業者	6	6	5	3.5	3.5
ブルジョワジー、小ブルジョワジー (1-4の合計)	10	16.5	19	20.5	21.5
5. 医者	5	4.5	6.5	4.5	4.5
6. 法曹	5	9	12.5	12.5	12
7. 大学教授	-	2.5	1.5	0.5	0.5
8. 芸術家など	5	2.5	2	3.5	3.5
自由業 (5-8の合計)	15	18.5	22.5	21	20.5
中級・下級官吏	15	17	19.5	16.5	16.5
9. ギムナジウムの教師	23	13.5	9	6	5
10. 他の教師	2	2	4.5	10.5	14.5
教師 (9-10の合計)	25	15.5	13.5	16.5	19.5
聖職者	-	2.5	0.5	0.5	-
学生	4	4	1.5	2.5	3
農民	-	0.5	-	-	-
将校	-	0.5	-	-	-
企業の従業員	-	1	-	1	0.5
代議士	6	7	4	2.5	1
市会議員	5	4.5	4	7	5
文学者	6	2	1.5	2.5	2
不明	2	0.5	1.5	3.5	4.5
その他	2	0.5	1.5	3.5	4.5
合計 (%)	100	100	100	100	100
合計 (人)	59	171	187	628	710

※ Hroch, "The disintegrated type: the Flemish movement", p. 110 の表 31 を参考に著者が作成。

の割合はそれほど多くはないのだが、年報のコンテストの開催記録をみると、団体の会員ではない多くの学生がコンテスト参加していることがわかる。

第二に、民族歌謡や演劇の振興である。そのためにウィレムス基金本部では歌本が発行されたり、歌謡や演劇のコンテストが開催されたりした。地方支部においても、たびたびコンサートが開催されたり、演劇が上演されたりした。民族歌謡や演劇は、何よりネーデルラント語普及の一手段として重視されていたのである。とりわけ演劇については、フランデレン運動では「国民演劇 (Nationaal Toneel)」という考えが1840年以降提示されていた。これは、ネーデルラント語による演劇制作を促進し、道徳的で教訓的な内容を含み、近代の過ちを批判する現代劇や祖先の偉大さを強調する歴史劇を理想とするものであった⁽³⁴⁾。1850年代に入っても大半の公的常設劇場では専らフランス語で劇が上演されており、フランデレン運動指導者は自分たちの言葉で演劇を定期的に公演する場の建設を求めていく。ウィレムス基金のなかでも団体の施設として演劇用ホールの整備が進められ、地元の演劇サークルへの支援、あるいはこれを下部組織として取り込む動きも見られた⁽³⁵⁾。

第三に、ネーデルラント語による書籍の出版である。ウィレムス基金では、1851年から1901年までの間に197作品、合計527,445部の書籍を発行している⁽³⁶⁾。例えば、『年報』を毎年発行して本部や各支部の活動の周知に努めている。また、ネーデルラント語で書かれた書籍の目録、歌本や若者向けの物語集などの書籍を定期的に数多く出版し、ネーデルラント語習得やネーデルラント語による文化活動を支援した。それ以外にも、『家庭教育のための化学教科書』（1851年）、『フランデレンの最重要な産業部門に関する簡潔な論文』（1852年）、『植物学入門』（1856年）、J. S. ミルの『自由論』のネーデルラント語訳（1869年）など多様なジャンルの書籍を出版していた。これには、ネーデルラント語による様々な学問研究、芸術活動を盛んにするねらいがあったと考えられる。

第四に、図書館の整備である。1865年にウィレムス基金図書館がヘントに開設されて以来、各支部にも同様の図書館建設が進んだ。図書館には小説や詩集、学術書に加え、一般向けからフランデレン主義的色彩の濃い雑誌や定期行物まで取り揃えられていた。これらの図書館の運営方針として、ウィレムス基金の会員以外にも無料で解放されていた点は重要である。表3は、ヘントにあるウィレムス基金図書館の1868年度の新規利用申込者の職業をまとめたものである。ここからわかるように、ウィレムス基金図書館の新規申込者が最も多いのは男女ともにギムナジウムや大学の学生となっている。さらに、男女ともに2番目に多いのが工場労働者となっている点は目を引く。新規申込者に学生や工場労働者が多い要因として、ヘントにはヘント大学があることや、フランデレン地域随一の工業都市で機械制工場が多くみられたことがあげられる。両者の大半はウィレムス基金の会員ではなかったが、このように彼らに無償で図書館を利用する機会を与えることで、ウィレムス基金はフランデレン運動の潜在的支持層を掘り起こし、そのすそ野を広げようとしていた可能性はみてとれるのである。

第五に、各種の教育・娯楽イベントの開催である。例えば、歴史や外国語などに関する連続講義や多様なテーマの講演会の他、コンサート、夏祭りなどが行われた。ウィレムス基金特有のイベントとして、「コンサート講演」が挙げられる。これは、コンサートと講演会を組み合わせた催し物であった。そのプログラムをみると、「入場自由・無料」という触れ込みと併せてウィレムス基金の紹介と入会の勧誘がなされている。このように、イベントの中には無料で開放されているものもあり、図書館の例と同様に、ウィレムス基金はその活動を広く宣伝するとともに、より多くのフランデレン住民を対象にネーデルラント語の学習環境を提供しようとするなど、ウィレムス基金の活動を通してフランデレン主義的思想を普及しようとしていたのである。

ウィレムス基金は、規約第1条には活動対象は「フランデレン住民」と記述されていたものの、その会員は都市部の中間知識人階級が中心となっていた。その一方で、上記の通り、同団体は学生や労働者を対象としたさまざまな活動を企画していた。会員内の学生や労働者の割合

表3 ヴィレムス基金図書館の新規利用申込者（1868年）

男性		女性	
学生	216	学生	32
工場労働者	166	工場労働者	13
大工, 家具職人, たる屋	44	仕立屋, 帽子職人, 手袋職人	25
鍛造職工, 錠前屋, 配管工, ブリキ職人	41	花屋, 婦人帽製造業者, 刺繍工	10
靴職人, 仕立屋	40	家政婦	3
針金工, 鋳物師	14	その他	5
なめし革業者, 馬具屋	4	記入なし	22
機械工, 仕上げ工	9		
印刷工, 製本業者, 植字工	22		
事務員, 労働者, 船員, 運転手	35		
兵士, 消防士, 警察官	15		
パン職人, 畜殺場作業員, ビール醸造業者, 宿屋	16		
彫刻家, 旋盤工, 石工, 煉瓦職人	15		
画家, 壁紙はり職人	21		
農民, 庭師	6		
小売店主, 行商人, ブラシ職人, 椅子職人, かご細工師	6		
タバコ製造業者	7		
その他	37		
記入なし	5		
計	719	計	110

※ *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, Gent, 1868, pp. xlv-xlvi を基に著者が作成。

は高くないにも関わらず、なぜこのような現象が起きたのだろうか。考えられる理由として、彼らは会員に開かれた基金の活動に入会を義務付けられることなく参加できたのである。すなわち、ウィレムス基金の指導者たちは学生や労働者をターゲットとした活動を企画し、実際にこうした活動は1860年代後半にはある程度うまくいっていたと解釈することが可能だろう。

農村部まで拡大したカトリック系文化団体・ダヴィッド基金

一方、カトリック系のダヴィッド基金は、1875年1月にルーヴェンにて創設された。初期フランデレン運動のカトリック派の指導者であったダヴィッド (Jan Baptist David) にちなんで名づけられた同団体は、設立当初より教権主義的性格が強かった。主な創設メンバーは、ルーヴェン・カトリック大学の公式学生団体で初期フランデレン運動をけん引した「時間をかけて、勤勉に (1836-1945)」の会員であったこともわかっている。その際、自由主義路線を明確にして活動を拡大していたウィレムス基金を16世紀の「乞食党 (Geuzerij⁽³⁷⁾)」と重ね合わせて反カトリックとして批判することで、ウィレムス基金のカトリック会員を取り込むことに成功する。設立当初の1875年にすでに2500人が入会し、27の地方支部が置かれるほどの熱狂的状况の下で活動が開始された。政治の世界では1860年代を通してフランデレン運動内部で自由主義派とカトリック派の協調関係に基づく「独立人民党」が維持されたが、選挙活動を

通して両者の方針の違いが明確となり、1870年代に入って「独立人民党」は崩壊していった。執行部メンバーとして文化団体の運営に携わっていた人々の大半がフランデレン運動の政治的指導者であったこともあり、政治世界における勢力図の変化が文化団体の活動にも影響を及ぼしていたと考えられる⁽³⁸⁾。その後、ダヴィッド基金の会員数は1879年に5000人を超え、1888年には7064人に達するなど⁽³⁹⁾、同基金は自由主義派のウィレムス基金をしのぐ勢いを得ていく。これには、急速な産業化を背景に世俗的な労働者文化が発展したワロニー地域に対して、農村部が大半のフランデレン地域では保守的なカトリック支持が強かったことが関係しているだろう。また、1884年にカトリック党が政権を奪取し、自由党勢力が大幅に後退したことが影響していたといえよう。こうして、フランデレン運動内で1870年代以降イデオロギー対立が先鋭化するなかで、ダヴィッド基金は反教権的ウィレムス基金に対抗して「宗教、言語、祖国 (Godsdienst, Taal, Vaderland)」というスローガンを掲げ、フランデレン地域の言語の普及と並んでカトリック信仰の普及を重視していくことになるのである。

続いて、ダヴィッド基金の組織編制を確認する。同団体では本部ルーヴェンに執行部が置かれ、この執行部が団体全体の運営方針を決めていた。一方、ウィレムス基金の事例と同様にフランデレン各地に支部が置かれ、それぞれに執行部が設置された。ダヴィッド基金では団体が創設された1875年に27、5年後には47もの地方支部が置かれるなど⁽⁴⁰⁾、ウィレムス基金より速く団体の活動が各都市に広まっていった。支部設置に関する最大の両団体の違いは、ダヴィッド基金では農村部にも多く地方支部が置かれる傾向にあったということである。後年の1907年段階では、ウィレムス基金では9支部が村に置かれたのに対し、ダヴィッド基金では72支部中41支部が村に置かれた⁽⁴¹⁾。このように農村部への広がりが見られた背景には、ダヴィッド基金が会員として各地の下級聖職者を取り込んでいたことがあげられる。ダヴィッド基金の会費は年間最低5フランであり、会員構成では専門職や、官吏、教師の割合が高い点はウィレムス基金と一致していたが、聖職者の割合が高い点はウィレムス基金と決定的に異なっていた。本部や支部の執行部の重要な役職にも多くの聖職者が就いていた点も指摘しておこう。

次に、ダヴィッド基金の活動内容をみていこう。同団体の設立目的は、設立当時公表された回状⁽⁴²⁾やダヴィッド基金の規約第1条と第2条において掲げられている⁽⁴³⁾。すなわち、「フランデレン民族が知的かつ道徳上発達するため、また、国民精神を高揚させるために」、「ネーデルラント語の使用と文学研究を促進する」というものである。ウィレムス基金規約第1条と比較すると、①ネーデルラント語の使用と研究の奨励を通して、②フランデレン住民を知的にかつ道徳上発達させ、③国民精神を強化させるという3点が一致していることがわかる。

それでは、このような目標を達成するためにダヴィッド基金ではどのような活動が行われていたのだろうか。ダヴィッド基金の規約第3条では、目標を達成するための手段として書籍の出版、ネーデルラント語やネーデルラント語芸術に関連する賞の授与、図書館の設立や講演会

の開催、初等学校の児童から大学の学生まで、多くの若者に向けた言語や芸術の修練の奨励があげられている。ここで、先述のウィレムス基金の活動内容と比べてみると、非常に酷似した活動内容であることがわかる。ダヴィッド基金でも中間知識人階級や聖職者といった会員のみならず、学生や一般大衆を対象としたさまざまな活動が企画され、学生たちや一般大衆もまた無償でコンテストや講演会への参加、図書館の利用といった催し事にしばしば加わることができたのである。もちろん、詳しく活動をみると、ウィレムス基金に対抗したカトリック派特有の活動が行われていたことがわかる。第一に、ダヴィッド基金が設立されてすぐの時期は反自由主義的小説が多数出版された。医師で作家のスニーデルス (Jan Renier Snieders) はダヴィッド基金設立と同年に小説『ケンペンの乞食党 (De Geuzen in de Kempen)』を出版したが、オランダ独立戦争期のトゥルンハウト(現アントウェルペン州)を舞台にしたこの小説ではネーデルラント地方の「乞食党」をその反カトリック的態度が分断を生んだとして批判的に描いている。これに対し、自由主義派の歴史家でウィレムス基金ヘント支部の会長経験もあるフレデリック (Paul Fredericq⁽⁴⁴⁾) は、後年に自由主義者としての立場からこの小説を歴史的事実の歪曲と厳しい評価を下している⁽⁴⁵⁾。第二に、ダヴィッド基金が企画したイベントのプログラムに当然のごとくカトリックの典礼が組み込まれていたということである。例えば、1879年の聖霊降臨日にルーヴェンで開催された大規模な文学と音楽の祭典では、参加者によるダヴィッドの墓がある教会墓地訪問と現地司祭による説教から2日にわたるプログラムが始まっている。また、プログラム内の教育に関する講演会では、中等教育のネーデルラント語化の要求とネーデルラント語による教理学習の重要性を説く主張が並んで展開されている。つまり、ウィレムス基金と設立目的もそれを実現するための手段も共通していたダヴィッド基金は、自由主義路線を明確にしたウィレムス基金に対して不満をもったカトリック派による対応物であったといえることができるだろう⁽⁴⁶⁾。

フレデリックは、ウィレムス基金は常に生活問題の解決に努めているがダヴィッド基金は問題への関心が低いと批判した一方で、両団体の対立があつてこそフランデレン地域に読書習慣やフランデレン主義思想をより広めることができたと言っている⁽⁴⁷⁾。実際に、両団体はもう一方の団体を引き合いに出して自分たちの団体の方が優れていると競って主張し合いながら、それぞれの方針の下、フランデレン地域に共通する社会問題の対処に取り組んでいたのである。

3. フランデレン運動指導者たちが描くベルギー・フランデレン観

時代区分の期間Ⅲの時代に入っても、フランデレン運動の担い手は主に都市部の中間知識人階級であった。しかし、彼らはフランデレン主義文化団体の運営に加わり、多くの地方支部を設置したり、無償で催しや施設を開放したりししながら、活動のターゲットを階級的にも地理的にも広く想定していた。実際、当時の文化団体の『年報』をみると、農民や都市労働者に関

する記述が多くみられ、それ程運動の指導者たちは一般大衆へ目を向けるようになっていたといえよう。本章では、フランデレン運動の拡張がはかられた期間Ⅲにおいて運動の指導者層は、「ベルギー」や「フランデレン」を「農村」と「都市」という一般大衆の生活世界とどのように関連づけて構想していたのかを分析していきたい。その際、フランデレン運動の主たる担い手が時代を下るに従って変化した点に鑑み、自由主義派が優勢であった1860年代は『ウィレムス基金年報』に収められた寄稿文を、カトリック派の方が優勢となった1880年代は『ダヴィッド基金年報』に収められた寄稿文を手がかりに、それぞれ分析していくこととする。

理想化される農村地域

まずは、フランデレン主義文化団体の会員層はフランデレン地域の大半を占める農村に対し、どのようなまなざしを向けていたのだろうか。1860年代の自由主義派の主張からみていこう。その一つが、農民に対する教育を充実させるべきという主張である。

1868年発行の『1869年度ウィレムス基金年報』ではベルギー南部ナミュール州、ジャンブルーにあった国立農業研究所の教育活動に関する匿名の評論「ジャンブルーの農業研究所⁽⁴⁸⁾」が掲載されている。この農業研究所では、多数のフランデレン地域出身学生を含む農村出身学生に対して教育が行われていた。本評論では、実践とともに農学や自然科学、農業法など理論を重視する農業研究所のカリキュラムを紹介して、農民が十分な知識を身につけることの重要性を強調している。このように農業研究所による農民教育を称賛している一方で、国による農民教育がフランス語でしか行われていないことを批判している。著者にとって問題なのは、フランデレン語しか話すことができない農民がその使用言語ゆえに十分な農業教育を受けられていないことに他ならなかった。

同じく『1869年度ウィレムス基金年報』には、農村の子ども向けの教科書を推薦する匿名の記事「農村に住む子どもたち⁽⁴⁹⁾」も掲載されている。その中では、子どもたちはこれらの教科書を読み切ることで「農民の幸福に必要なもの」を身につけられると主張されている。このように、ここでも農民が十分な知識を身につけることの重要性が説かれている。さらに、農民は他者や書籍から学ぶ姿勢を維持し、道具の工夫などを通して各人が置かれた状況下で「最も利益を生む方法を追求し、質の高い農作物や家畜を生産できるよう努めること」を促すなどして、農業を盛んにすることができると説いている。すなわち、農民教育の充実こそが、フランデレン農業の発展をもたらすというのである。

19世紀後半に入ってもフランデレン農村地域では零細小作経営と家内制手工業によって支えられた伝統的な産業構造が残存していた。自由党の自由貿易経済政策の下で産業化が急激に進展した一方、フランデレン農村地域では伝統的産業構造が行き詰まりをみせるようになった。伝統的産業構造の下では、少ない収入を補おうと女性や子供も家庭の重要な労働力として長時

間労働に従事していたために、フランデレン運動指導者が望むような教育水準の向上にはいたらなかった。こうした農村地域の低迷した状況を打破するために、主に都市の中間知識人階級からなるウィレムス基金のフランデレン主義者は農民啓蒙の必要性をたびたび主張するようになったと考えられる。彼らは在野の自由主義者という立場から、社会改良運動の一環として農民への知識教授を訴え、これによる農民の生活水準の改善、社会的上昇とひいては農村部の生産性の向上を目論んだのであろう。ベルギー独立当初、言語の違いはあくまで階級差に結びついており、言語問題は階級を超えてフランデレン地域の住民全体に共有された問題ではなかったことは先に確認した通りである。しかし、ここでフランデレン運動指導者層が言語・教育上の平等の実現を地域の産業・経済発展と関連付けて語ったことにより、言語問題はフランデレン地域全体の利害に関わる問題となりえたのである。

二つ目は、フランデレン運動指導者が理想の農民像や農村像を形成していたということである。「農村に住む子どもたち」では、幸福な農民になるために必要なものとして、「農業労働への意欲と愛着、人間や動物に対する優しさ、間違った考えや迷信の拒絶、進歩を目指した努力、農業と関係するあらゆる事柄の知識への欲求」などがあげられている。また、来客や地域の日雇い労働者に対して肩ひじを張らずに気さくに接し、家畜に対しても愛情を込めて接する朗らかさと、よりよい農業のために他者から学ぶ姿勢を忘れない意欲や勤勉さを持ち合わせた農民の姿が理想の農民像として描かれている。これは、明朗快活かつ質実剛健というステレオタイプ化されたゲルマン系フランデレン地域の農民イメージが、ウィレムス基金会員層が理想とする農民像であったことを示唆している。こうした理想像は、『年報』に寄せられた詩「トリーエンチェ、器用な農村の娘⁵⁰⁾」の表現からも見て取れる。この詩は西フランデレン州コルトレイク支部所属の市立学校校長デ・フリーデ (De Vreede) の詩で、トリーエンチェという農家の娘の一日の生活を描いている。トリーエンチェは誰からも好かれる人物であり、朝早起きして農作業や家畜の世話、家事をこなし、仲間と冗談を交えておしゃべりをしたり、軽快に歌を歌ったりしながら和気あいあいと働いていたと描写され、上記の明朗快活かつ質実剛健な理想の農民像と一致している。さらに、この詩では、穀物生産や牧畜と併せて亜麻など家内工業に関係する商品作物の生産が行われ、農作業や家事は女性や子供を含めた家族全体で担っているという、フランデレン農村地域の伝統的産業構造が描かれている。しかし、ここで描かれるフランデレン農村地域からは、1840年代の経済危機や1860年代以降の海外産品流入の影響を受けて低迷に苦しむ様子はあまり感じられない。むしろロマン主義の影響を強く受けたこのイメージは、「フランドル地域」が繁栄していた15、16世紀にさかのぼって、もはや失われゆく豊かで牧歌的な農村社会のイメージを理想化して描いているように思われるのである。

一方、ウィレムス基金に25年ほど遅れて1875年に設立されたダヴィッド基金の事例でも農業や農村部を重視する姿勢がみられる。都市市民中心のウィレムス基金に対し、農村部に多く地

方支部をもつダヴィッド基金は、フランデレンを農民の地域としてよりはっきりと理想化したイメージを持っていた。会員の一部に各地の下級聖職者が参加していたことは先述の通りであり、教区教会や初等教育を通して日常的に農民たちと接する立場にあったこともそうした傾向と符合する。農民層に力を入れていた傾向は、1884年のカトリック政権成立を受けてフランデレン運動内でカトリック派が勢いを増していた時期にあたる1888年の『ダヴィッド基金年報』からもはっきりと読み取れる。例えば、ブリュッセル郊外のオーベルエイセ支部ではルーヴェン・カトリック大学の農学者による耕作と化学肥料に関する講演会が開かれたり、ブラバント州の農村部にあるマルデレン支部では図書館に農業や科学に関する蔵書を取り揃えたりと、地方支部ごとに地域の実情に合わせた農業教育の充実が図られていたということがわかる。さらに、このことからダヴィッド基金の農民教育では現地の農民が農民たるために必要な実学が重視された傾向が読み取れる。

また、彼らがイメージするフランデレン農村像は、同じく『1888年度ダヴィッド基金年報』に収録されている詩「我がフランデレン地方⁽⁵¹⁾」においてあらわれており、そこではフランデレン農村が幸あふれる豊穡の地と表現されている。この詩では、北はスウェーデンの長い年月をかけて形成された氷河地形から、アルプスの悠久な自然、南はアテネの豊かな実り、イタリアの開放的な空気といったヨーロッパ各地の歴史ある土地と比較しても、決して劣らぬ、魅力的な「祖国フランデレン」としてフランデレン農村が賞賛されているのである。非常に抽象的な表現を多用して描き出されている農民の理想の地フランデレンは、穏やかな自然に囲まれた実り豊かな大地であり、そこに暮らす人びとが追い求めるべき理想郷として描かれているといえよう。実際には都市化の裏で伝統的産業構造が行き詰まり、低迷するフランデレン農村をなぜこのような高みにまで引き上げて理想化したのだろうか。1880年代という時期はカトリック派が政権を奪取していたこともあってダヴィッド基金が勢いづいていた一方で、同時に社会主義勢力も勢いを増していたという背景がある。当時のカトリックの思想では、農業は生活の基本となる食に直結する営みであり、農民は中世からの農村像を引き継ぐ「コーポラティズム秩序⁽⁵²⁾」のなかで出生や家族に関して他の住民の規範となる価値を体現していると考えられていた。また、自然に親しむという点においても農業が重要視されていた⁽⁵³⁾。しかし、社会主義は労働者の利益を何より重んじた一方で、反教会・反フランデレンを掲げる運動であった。それゆえ、カトリックは家族中心の価値観などといった農民のメンタリティが、都市化に伴う社会主義や個人主義の発達の防波堤になると考え⁽⁵⁴⁾、あえて伝統的産業構造に基づく「豊かなフランデレン農村地域」をフランデレン人の故郷として理想化したものと考えられる。

自律的都市労働者の育成

一方、19世紀後半以降の急速な産業化の進展のなかで、フランデレン地域でも農村地域か

らの都市部への出稼ぎや移住者が増加して都市化がすすんだ。その際、各都市では家内制手工業が残りつつ、ワロニーの重工業地域と比べるとゆっくりではあったものの、機械制工場生産が徐々に増加していった。そうした状況を背景に、フランデレン主義文化団体の主たる担い手であった中間知識人層は都市の労働者階級に対してどのようなまなざしを向けていたのだろうか。

まずは、自由主義系ウィレムス基金の事例からみていく。都市生活に関するウィレムス基金会員の言説のなかでも、農村の場合と同様に、都市労働者に対する教育を充実させるべきだという主張がみられる。

『1869年度ウィレムス基金年報』にはヘント市の助役ウァーヘネル (A. Wagener) による講演録「子供の労働時間の規制」が掲載されている。この講演では、工業都市ヘントにおける児童の長時間労働を以下のように問題視している。

私は自分自身に言い聞かせてきました。今は健康でほおを赤らめ、無知から救い出されようとしている何千もの子ども達が、数年のうちに、稼ぎの面で父や母を助けるため、朝早くから夜遅くまで工場に働きに行くことを強いられていようと。市当局が一般大衆の子供達に対して十分に提供してきたすばらしい教育は、短期間の間に、完全に忘れ去られるわけではないでしょうが、それでも大部分は、労働者にとって失われたものとなっているでしょう。子供達の心や知力を養うために、市立学校で行われてきた努力は、既にこのように無駄になっていることでしょう！

(中略) 我々は自分たちの祖先について、また、ギルドの下で団結し、同じだけの慎重さと賢明さでもって共同体の権利を守ってきた勇敢な労働者について、さらに、自由と独立のために戦い、当時決して専制政治のくびきを負うことはなかった勇猛果敢なフランデレン人について、知ろうと努めなければなりません。一言でいえば、誰もが少なくともフランデレンの都市や州、そしてフランデレン地域の歴史を概略的に知ることが望ましいでしょう。読み、書き、計算ができるようになれば、子どもは十分に学んだと考えるのが一般的です。もしすべての市民が読むことができ、書くことができ、計算することができれば、我々は進歩の道筋において既に大きな一歩を踏み出すだろうということを否定しません。(中略) すでにお話したように、私は団体の名の下、地方議会でこの重要な点〔＝国民教育〕に関する報告を扱い、3月16日の議会で、評議会は我々の報告に沿った請願を政府や両院に送ることに決めました。(中略) それから、私は政府や下院、上院が我々の要望を真剣に検討するようになることを願いはじめています⁽⁵⁵⁾。

「統一同盟」時代の1842年に制定された初等教育法（ノトーム法）では、公立小学校とカトリックの私立小学校の並立や、自治体の公立小学校教育における自主権が認められていた。地域の大半が農村部からなり、保守的で敬虔なカトリック教徒が多いフランデレン地域ではカトリック系の私立学校がワロニー地域より多い傾向にあったが⁽⁵⁶⁾、産業の機械化が進み、自由主義者が市政を握っていたヘントでは、市立学校の整備が進められていた⁽⁵⁷⁾。しかしながら、ウァーヘネルによると、ヘントでは多くの労働者階級の子供たちが10歳以下の年齢で工場に働きに出て家計を支えていたため、学校に通うことができなかった。それゆえ、せっかく整備している無償の市立学校も無駄になってしまっているというのである。さらに、子供たちは無知で半人前ゆえに劣悪な労働環境におかれているという。さらに、ウァーヘネルはフランドル地方が繁栄していた中世期の「賢明な市民」の例を引き合いに出しながら、「もしすべての市民が読み、書き、計算をすることができたならば、我々は大いに進歩しただろう」と述べた上で、ウィレムス基金会員であると同時に、市の助役として児童労働の規制に関する請願を国会に提出した旨を紹介している。

農村部と同様、機械制工場生産に移りつつある都市部においても、フランデレン地域の伝統的産業構造の下で育った子供は家族の構成員として重要な労働力とみなされた。それゆえ、教育レベルの低さが低賃金で劣悪な環境における児童労働に結びついていた。そこで、ウァーヘネルは、人道主義的観点から当時の労働者階級の劣悪な労働環境を批判しつつ、社会改良運動の一環として公立学校教育を労働者階級まで普及させる必要性を説いたものとみてよい。そして、公立学校教育が労働環境の改善とひいてはフランデレン地域の発展につながるものとして、都市労働者層の子どもを教育する重要性を主張したといえるのではないだろうか。

このように労働者階級の子どもに対する公立の学校教育の充実を訴えたウィレムス基金会員層に対して、カトリック系のダヴィド基金では、大衆教育の手段としてあくまで教会や修道院が運営する私立学校やカトリック教理が盛り込まれた宗教教育が想定されていた。カトリック派は、コーポラティズム思想に基づく多様な階層の利益が調和したキリスト教社会を実現するため、恩顧主義の立場から宗教・教育・慈善を通して下層階級の統合を図ろうとしたのである。

また、同じく『1868年度ウィレムス基金年報』に収録されたキント（Lodewijk T. Kint）による歌曲「労働」では、勤労そのものの素晴らしさが以下のように歌われている。

（中略）なんと素晴らしいことか！

自分の力でパンを手に入れ、自由を経験することは。

いや、これ程心の底から喜ばせるものはない。

なんと素晴らしいことか、パンを手に入れる事は。

織布であれ、紡績であれ、

昼には幸福を、夜には休息をもたらす。

なんと素晴らしいことか！

自分の力でパンを手に入れ、自由を経験することは。

さあ、元気に仕事に就いたならば、

Volkは産業によって成長する。

その時、それぞれが義務を知っている。

さあ、元気に仕事に就いたならば、

決してフランデレンのスローガンを忘れない。

これは常にフランデレンの繁栄に利するもの。

さあ、元気に仕事に就いたならば、

Volkは産業によって成長する⁽⁵⁸⁾。

この歌曲のなかで、一般市民が労働を通して自分の力で生活を成り立たせることは大変喜ばしいこととして描かれている。さらに、市民が労働に従事することで自身の力で自由を手にし、それはひいてはフランデレンの、国民の繁栄に繋がると描写されている。歌詞のなかの「フランデレンのスローガン (Vlaamsche Leus)」が何を指すかについては様々な解釈ができるだろうが、一つの可能性として、同じく『1868年度ウィレムス基金年報』に収録された「人権と市民の権利について⁽⁵⁹⁾」という弁護士のア・クレルク (Em. De Clercq) による講演録にみられるような中世フランドル地方にまつわる表現と併せて考えてみることもできるだろう。この講演はフランス革命期に模索された市民権について論じたものであるが、冒頭で自らの「自由」を守るために諸外国と戦った事例として中世フランドル地方の諸都市を取り上げ、「中世の暗闇の只中において自由の旗を掲げたフランデレンの自治体に高く誇りをもつ」と表現している。もちろん、中世の「フランドル地方」と19世紀のベルギー北部「フランデレン地域」はまったく別の地域概念であり、領域的にズレがあることは言うまでもない。それにも関わらず、ア・クレルクはあえて両者を重ね合わせることで、自治を維持して繁栄していた中世フランドル都市に自分たちのルーツを見出そうとしているのである。このような表現は、当時の『年報』に掲載されている評論や詩に多く見られるものである。これをふまえて、キントの歌曲をあらためて検討してみると、中世以来継承されてきた都市の自治の伝統の下、一般市民は労働を通して自身の力で「自由」を守り、これがフランデレンとフォルク (Volk) の繁栄をもたすものと考えられていたとの解釈が成り立つ。フランデレン主義者は、「フランドル都市」が繁栄していた中世にさかのぼってそのイメージを踏襲することで、近代都市における理想化された自律的な都市市民像を形成したのである。

「ベルギー」内における「フランデレン」の位置づけ

ここまで、フランデレン運動を推進した二つの文化団体の会員が描くフランデレン観を、農村・都市における一般大衆の生活世界との関連から分析してきた。ここで興味深いのは、「フランデレン」という言葉と「ベルギー」という言葉の使い分けである。例えば、キントの歌曲の最終連では、「フランデレン」という言葉と Volk という言葉が連続して用いられている。この Volk は場合によっては「ベルギー国民」とも「フランデレン民族」とも解釈することが可能である。そもそもウィレムス基金の規約第1条では、あくまで「ベルギー」という枠組みのなかで「フランデレン住民」という言葉を用いている。彼らは「フランデレン」を「ベルギー」の中でどのような要素として位置づけたのだろうか。主に以下の二つの観点から論じてみたい。

第一に、フランデレン運動指導者層はフランデレン、フランデレンの言語をワロニー、そしてフランス語に対置されるベルギーの構成要素とみなしていたということである。『1888年度ダヴィッド基金年報』には「フランデレン語を用いる人は何もできないというのは本当か?」という文章が匿名で寄稿されている。

我々は、[表題の問いに対して] そっけなくそれは本当ではないと答える。現在のところ、フランデレン語はギリシア語やラテン語を習得するには申し分のないほど適している。(中略)人々はフランス語の場合と同様に、フランデレン語の助けを借りて、非常に速く古典語の学習を進めている。フランデレン語を話す生徒に対して外国の諸言語を、同じく外国語の助けを借りて教えること。これは、わざわざ時間を無駄にするようなものではないのか?

(中略)しかし、私たちの母語はただ単に古語や現在使われている言語を習得するためにのみ有用なのだろうか?それは、優れた公用語であるということを超える価値はないだろう。(中略)フランデレンの言語は独自の美しさを有している。すなわち、他の言語よりずっと豊かで、固有の起源から引き出されている。さらに、力強く、快く響き、絵画のように美しく、様々な状況の変化に開かれており、古典語と似たようなところがある。(中略)ネーデルラント語文学はその卓越性ゆえに高く評価され、愛されるに値するのだ⁽⁶⁰⁾。

書き手は、フランデレン地域の言語もフランス語同様に学問や芸術にふさわしい固有の文化言語であると主張している⁽⁶¹⁾。ここから、使用言語が階級差と結びついていたベルギー独立当初の言語状況に対し、運動を展開していく過程でネーデルラント語をワロニー地域にとってのフランス語に相当するものにとらえなおし、フランデレン地域全体の文章語としてネーデルラント語を位置づけようとしたフランデレン主義者たる著者の意図が伺える。こうしたフラン

デレンの言語の位置づけはカトリック派・自由主義派双方に見られ、その背景には、彼らが19世紀中葉の不均衡な産業化の進行に対処していくなかで、言語問題を階級間の利害から地域間の利害へと読み替えていったことが影響しているといえよう。さらにカトリック派では、同じく『1888年度ダヴィッド基金年報』に収録された「どのような状況下でフランス語話者になったフランデレン女性がひどい行いをするのか⁽⁶²⁾」という論考で、フランス話者化は固有の言語（この場合はフランデレン語）および「独立性の喪失をもたらす墮落」と表現されている。女性がフランス語を話すようになることは、エリート層入りを可能にする、自由主義的女性の解放とみなすこともできる。しかし、フランデレン地域の農村性を重視するカトリック系のフランデレン主義者たる著者は、もとは農民の言語であるとするフランデレン語を捨ててフランス語話者化することを裏切りとみなしたのである。もとより、正書法論争⁽⁶³⁾（1839-1944）の折から、カトリック派ではヘゼレ（Guido Gezelle）を筆頭にフランデレンの農村地域（とりわけ西フランデレン州）の変種を基にしたフランデレン固有の標準語形成をめざすべきという主張がみられた。一方、自由主義派ではオランダとの言語・文化的統合をすすめるべきという主張が根強かった。今後さらに史料的分析が必要となるが、自由主義派はフランス語に対抗するために伝統的フランデレン農村の言語をめざしていた訳ではなかったのである。

第二に、フランデレン的イメージをベルギー全体へ投影していたということである。ウィレムス基金規約第1条に象徴されるように、19世紀のフランデレン運動は主としてあくまでベルギーという国家の枠組みのなかで展開されてきた。ウィレムス基金などの文化団体を通して活動したフランデレン運動指導者たちは、ロマン主義の影響下で「フランドル地方の歴史的繁栄の記憶と遺産」に頼り、上述のように明朗快活かつ勤勉で質実剛健なゲルマン系フランデレン農村民のイメージや、中世諸都市における自治の伝統を引き継ぐフランデレン都市民のイメージを形成していった。フランデレン運動の指導者は、このようにベルギーの構成要素としての「フランデレン」のイメージ形成を進めるなかで、それを文化大国フランスに対抗するベルギーの独自性として強調する傾向を帯びていった⁽⁶⁴⁾。後にフランデレン運動のバイブルとなる『フランデレンの獅子』などを著したコンシアンス（Hendrik Conscience）は、19世紀半ばにはベルギー人作家として称えられるようになる。彼の著作は19世紀を通じてフランス語にも翻訳され、フランデレン地域だけでなくワロニー地域においても読まれていた⁽⁶⁵⁾。19世紀半ばのフランデレン運動指導者はフランデレンこそが「非フランス」としての緩衝地帯となりうると、ベルギーという国の枠内でフランデレン運動を正当化したのである。

さらに、上記の「フランデレン」のイメージはウィレムス基金やダヴィッド基金以外でも広くみられた。ベルギーの国民文学の1つとして知られる『ウーレンシュピーゲル伝説⁽⁶⁶⁾』の著者、ド・コステル（Charles de Coster）が自身の発行する雑誌『オイレンスピースヘル（Uylenspiegel）』誌⁽⁶⁷⁾に寄せた1861年のある記事「ヨーロッパの光景－フランデレン語とワ

「ワロニー語」を一例としてみてみよう。

フラマン人〔フランデレン人⁽⁶⁸⁾〕たちよ、ワロニー人は我々の兄弟であり、ワロニー人も我々のようによく耕作し、よく働き、器用で、戦いのときには獅子ともなろうことを心にとめておこう。ワロニー人たちよ、恐れられているあのフラマン人たちも、消えてしまった方がいいと思っているあの言語も、我々の国民性の生きた源泉であり、ゲルマン的ないにしえのなごりであり、フランス的なものの侵略に対する強固な防波堤であることを心にとめておこう。そして、このような隣人関係は危険どころか有益であることも心にとめておこう。(中略)我々には二つの言語が必要なことから、二つともとっておこう。一方は我々の政府と我々の外交のためのもの、もう一方は我々の内面と我々の民族に密着した生活の言語である⁽⁶⁹⁾。

この記事の中で、ド・コステルはフランデレン人を勤勉で器用な農民、そして戦時には勇ましい戦士として描いている。これは、フランデレン運動指導者層が形成をはかった質実剛健で勤勉な農民像と、自由のために自ら行動する都市民像とも一致する。さらに、ド・コステルはこのゲルマン的気質をベルギー全体で共有される対フランスの「防波堤」として扱っているうえに、ワロニー人ももちうるものと考えたのである。ド・コステルはフランデレン人の父とワロニー人の母をもち、ブリュッセルで学生生活を送った経験を持っており、「フランデレン」と「ワロニー」の境界を生きた人物である。彼自身は、フランス語を用いて執筆活動を行っていたが、それにもかかわらず理想化されたゲルマン的「フランデレン性」をあえて据えようとした。こうして、フランスの圧倒的に優位な文化的影響力に対抗する論理を構築するとともに、ベルギー文化の独自性を模索したと考えられるのである。

おわりに

最後に、19世紀後半のフランデレン運動指導者層が「ベルギー」という枠組みのなかでどのように「フランデレン」を構想したのか、本論文で得られた知見を整理したい。

ベルギーはヨーロッパ大陸でもいち早く二重革命を成し遂げたが、これにより成立したのは人口の約1%にすぎないブルジョワ・地主層に政治権力が集中した自由主義国家体制であった。「統一同盟」の時代を経て、自由党政権時代にベルギーは急速な産業化を経験することになったが、これにより様々な社会問題が引き起こされた。階級間・地域間格差の拡大に基づく様々な社会問題に対処するために、19世紀後半、カトリック・社会主義勢力はそれぞれ社会集団を構想していったのである。また、こうした各政治勢力が伸張していくなかで、それ以前は担い手が都市の中間知識人階級に限定されていたフランデレン運動も拡張をめざしていった。

こうしたフランデレン運動の拡張にあたって、その文化的中核を担ったのがウィレムス基金とダヴィッド基金である。両団体には、フランデレン主義文化団体として党派を超えた共通性が存在した。第一に、団体の会員層が言語問題を教育や産業政策、労働問題、普通選挙導入など多様な社会問題と関連付けて語るようになったという点である。その一つとして、一般大衆に対する「言語」の教育が地域産業の発展につながるという言説が挙げられる。元来、フランデレン運動の主たる主張はあくまでネーデルラント語の地位を向上させることであったが、ベルギーは建国当初より「言語」の違いは地域差というよりむしろ階級差に結びついていた。しかし、こうして言語問題を階級間の利害から地域間の利害へと読み替えることでフランデレン運動の拡張をはかったのである。第二に、団体の会員層がロマン主義の影響を受け、繁栄した過去の記憶や遺産に依拠し、理想化された「フランデレン都市・農村」のイメージを形成したということである。ところがそのイメージは、実際に大衆が暮らす生活世界の苦しい実情から乖離したものであった。フランデレン主義者は、この構築された「フランデレン性」を多文化・多民族国家ベルギーの特徴と読み替え、フランス語文化と対置しようと主張した。こうすることで、ベルギー国内におけるフランデレン運動の存在意義を高めていったのである。

このような共通性を有する一方で、両団体の間には党派によるフランデレン主義実現のための論理の相違がみられた。まず、自由主義系のウィレムス基金は、主に都市部の中間知識人層で会員は構成されていた。彼らは自由党政権と相対する在野の自由主義進歩派ということが出来る。ウィレムス基金の会員は、どの地域や言語においても平等な公立学校教育実現を政府に訴えるなど、世俗的な公権力による社会問題の解決を主眼におく傾向にあった。彼らは、自治の伝統を維持して繁栄した「中世フランドル都市」、勤勉な農民が耕作する豊かな「中世フランドル農村地域」としての歴史をもつと考えたフランデレン地域をベルギーの重要な要素とみなした。そして、こうした中世フランドルのイメージに重ね合わせながら啓蒙主義的教育を一般大衆に施して近代の自律的な農村・都市市民育成をめざしたのである。一方、ウィレムス基金に対抗する形で設立されたカトリック系のダヴィッド基金は、会員には都市部の中間知識人層だけでなく、農村の下級聖職者や教師も含まれていた。彼らは反自由主義のキリスト教社会運動の一翼を担っていた。ダヴィッド基金の会員は、カトリック教会による教育、カトリック教理教育を重視するなど、政府だけでなく教会権力による社会問題の解決も想定していたのである。ダヴィッド基金会員のこうした対応の背景には、自由主義者のみならず、1880年代になって反カトリックの社会主義者が台頭してきたことも影響しているといえよう。彼らは、「コーポラティズム思想」の下、農村地帯が大半を占め、中世の有機体的農村像を引き継いでいると考えたフランデレン地域をベルギーの重要な要素とした。そして、カトリック聖職者による恩顧主義的教育を通して、自律的個人ではなく有機的人民の育成をめざしたのである。

このように、フランデレン運動内部において自由主義派とカトリック派はそれぞれの論理で

社会問題の解決を図っていたといえる。しかし、両者は政治的方向性の違いを有しながらも、フランデレン運動を支えるという意味で協働関係にあったのである。ベルギー研究でたびたび用いられる柱状化社会論では、分断や対立関係を前提としている。しかしながら、上記のフランデレン主義文化団体の事例からもわかるように、「フランデレン=カトリック、ブリュッセル=自由主義、ワロニー=社会主義」と単純化することはとうていできないだろう。フランデレン運動では自由主義派とカトリック派は「言語的平等の実現」という共通目標を掲げつつ、それぞれの論理で地域社会と結びつき、「競働」していたと考えられる。

フランデレン運動は19世紀を通じて対象を地域全体の社会問題へと拡大をはかることで発展し、フェーズBからフェーズCへと移行していった。その際、フランデレン主義者はベルギーという国家的枠組みの中で、統一された「フランデレン」を構想したのである。しかし、フランデレン地域において、ここまで見てきたようにフランデレン運動は決して一枚岩ではなかった上に、フランデレン運動に与さない者もいた。上記の「フランデレン」構想とは別の選択肢はあったのか、そもそも統一された「フランデレン」をめざさない構想はあったのかという問いについては今後の研究課題としたい。

参考文献

一次資料

・ウィレムス基金年報

Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869, Gent, 1868.

Jaarboek van Willems-Fonds voor 1870, Gent, 1869.

Jaarboek van Willems-Fonds voor 1872, Gent, 1873.

Jaarboek van Willems-Fonds voor 1880, Gent, 1881.

・ダヴィッド基金年報

Jaarboek van Davids-Fonds voor 1880, Leuven, 1881.

Jaarboek van Davids-Fonds voor 1888, Leuven, 1889.

・雑誌『オイレンシュピーゲル』

Charles De Coster, "Spectacle Européen :Flamands et Wallons, in: *Uylenspiegel*, 27 janvier 1861.

Berg, Christian, "The Symbolic Deficit. French Literature in Belgium and 19th Century National Sentiment, in: Kas Depez and Louis Vos, *Nationalism in Belgium: Shifting Identities, 1780-1995*, Macmillan Press, London, 1998, pp.61-71.

Couttenier, Piet, "National Imagery in 19th Century Flemish Literature", in: Kas Depez and Louis Vos, *Nationalism in Belgium: Shifting Identities, 1780-1995*, Macmillan Press, London, 1998, pp. 51-60.

De Coster, Charles, *Charles De Coster journaliste ;44 articles politiques de l'auteur d'Uylenspiegel*, Édition Esseo, Bruxelles, 1959.

Depez, Kas and Louis Vos, "Introduction", in: Kas Depez and Louis Vos, *Nationalism in Belgium: Shifting Identities, 1780-1995*, Macmillan Press, London, 1998, pp. 1-19.

_____, "The Language of the Flemings", in: Kas Depez and Louis Vos, *Nationalism in Belgium: Shifting*

- Identities, 1780-1995*, Macmillan Press, London, 1998, pp. 96-109.
- De Schryver, Reginald, "The Belgian Revolution and the Emergence of Belgium's Biculturalism", in: Arend Lijphart (ed.), *Conflict and Coexistence in Belgium*, Institute of International Studies, University of California, Berkeley, 1981, pp.13-33.
- _____, Bruno DeWever, Gaston Durnez, Lieve Gevers, Pieter Van Hees en Machteld De Metsenaere, *Nieuwe encyclopedie van de Vlaamse Beweging*, Lannoo, Tielt, 1998.
- De Vroede, Maurits, "De samenwerking van de Vlaamsgezinden doorheen de geschiedenis van de Vlaamse Beweging", *Bijdragen en Mededelingen betreffende de Geschiedenis der Nederlanden*, Deel 87, Nederlands Historisch Genootschap, Utrecht, 1972, pp. 234-252.
- D'Hondt, Bart, "Geschiedenis van het Brugse Willemsfonds (1872-2000)", in: Juul Hannes (red.), *De Charme van de rede. Huldeboek Albert Claes*, Liberaal Archief, Gent, 2004, pp. 163-218.
- Draper, Mario, *The Belgian Army and Society from Independence to the Great War*, Palgrave Macmillan Press, London, 2018.
- Elias, Hendrik Jozef, *Geschiedenis van de Vlaamse Gedachte: 1780-1940*, vol. 4, De Nederlandsche Boekhandel, Antwerpen, 1963.
- Gevers, Lieve, "The Catholic Church and the Flemish Movement", in: Kas Depez and Louis Vos, *Nationalism in Belgium: Shifting Identities, 1780-1995*, Macmillan Press, London, 1998, pp. 110-118.
- Fredericq, Paul, *Uit de Geschiedenis van Willems-fonds en Davids-fonds*, Julius Vuylsteke-fonds, Gent, 1909.
- Huysse, Luc, "Political Conflict in Bicultural Belgium", in: A. Lijphart (ed.), *Conflict and Coexistence in Belgium*, Institute of International Studies, University of California, Berkeley, 1981, pp.107-126.
- Hermans, Theo (ed.), *The Flemish Movement: A Documentary History 1780-1990*, the Athlone Press, London, 1992.
- Hroch, Miroslav, "The Disintegrated Type: the Flemish Movement", in: Miroslav Hroch, *Social Preconditions of National Revival in Europe*, Columbia University Press, New York, 2000, p. 107-116.
- Janssens, Marcel, "The Two Literatures in Belgium since 1830", in: Arend Lijphart (ed.), *Conflict and Coexistence in Belgium*, Institute of International Studies, University of California, Berkeley, 1981, pp.93-106.
- Lijphart, Arend, "the Belgian Example of Cultural Coexistence", in: Arend Lijphart (ed.), *Conflict and Coexistence in Belgium*, Institute of International Studies, University of California, Berkeley, 1981, pp.1-12.
- Lis, Catharina, *Social Change and the Labouring Poor: Antwerp, 1770-1860*, Yale University Press, New Haven, 1986.
- Lorwin, Val, "Belgium: Region, Class and Language in National Politics", in: Robert A. Dahl, *Political Oppositions in Western Democracies*, Yale University Press, London, 1966, pp. 147-187.
- Mcrae, Kenneth Douglas, *Conflict and Compromise in Multilingual Societies: Belgium*, Wilfrid Laurier University Press, Waterloo, 1986.
- Nörtemann, Gevert H., "Memories and Identities in Conflict: The Myth Concerning the Battle of Courtrai (1302) in Nineteenth-Century Belgium", in: Jane Fenoulhet and Lesley Gilbert, *The Narratives of Low Countries History and Culture: Reframing the Past*, UCL Press, London, 2016, pp. 63-72.
- Polasky, Janet, "Liberalism and Biculturalism", in: Arend Lijphart (ed.), *Conflict and Coexistence in Belgium*, Institute of International Studies, Berkeley, 1981, pp.33-45.
- Rowntree, Benjamin Seebohm, *Land and Labour: Lessons from Belgium*, Macmillan Press, London, 1911.
- Stengers, Jean, "Belgian National Sentiments", in: Arend Lijphart (ed.), *Conflict and Coexistence in Belgium*, Institute of International Studies, University of California, Berkeley, 1981, pp.46-60.
- Tollebeek, Jo, "Historical Writing in the Low Countries", in: Stuart Macintyre, Juan Maiguashca, and Attila

- Pók (ed.), *The Oxford history of historical writing: Volume 4: 1800-1945*, Oxford University Press, Oxford, 2011, pp. 283-302.
- Van Eenoo, Romain, "Honderd jaar Vlaamse Beweging I", *Ons Erfdeel*, Jaargang 22, 1979, pp. 785-788.
- Van Ginderachter, Maarten, *The Everyday Nationalism of Workers: A Social History of Modern Belgium*, Stanford University Press, California, 2019.
- Velthoven, Harry van, Jeffrey Tyssens, *Vlaamsch van: taal, van kunst en zin - 150 jaar Willemsfonds (1851-2001)*, Liberaal Archief, Ghent, 2001.
- Verhaegen, Benoît, *Contribution à l'histoire économique des Flandres I*, Éditions Nauwelaerts, Louvain, 1961.
- Vos, Louis, "Shifting Nationalism: Belgians, Flemings and Walloons", in: Mikulas Teich and Roy Porter *The national question in Europe in historical context*, Cambridge University Press, Cambridge, 1993, pp. 128-147.
- _____, "The Flemish National Question", in: Kas Depez and Louis Vos, *Nationalism in Belgium: Shifting Identities, 1780-1995*, Macmillan Press, London, 1998, pp. 83-95.
- Willemyns, Roland, "Integration vs. Particularism: The Undeclared Issue at the First "Dutch Congress" in 1849", in: Joshua A. Fishman (ed.), *The Earliest Stage of Language Planning: the "First Congress" Phenomenon*, Walter de Gruyter, Berlin/ New York, 1993, pp. 69-83.
- Wils, Lode, *Honderd Jaar Vlaamse beweging: Geschiedenis van het Davidsfonds*, vol.1, Davidsfonds, Leuven, 1977.
- _____, *Vlaanderen, België, Groot-Nederland : mythe en geschiedenis*, Davidsfonds, Leuven, 1994.
- Zolberg, Aristide, "The Making of Flemings and Walloons", *Journal of Interdisciplinary History*, vol.2, The MIT Press, Cambridge, 1974, pp.179-235.
- _____, "Transformation of Linguistic Ideologies: The Case of Belgium", in: Jean-Guy Savard et Richard Vigneault (et.), *Les États multilingues: problèmes et solutions*, Presses de l'Université Laval, Québec, 1975, pp. 445-472.
- 石坂昭雄「ベルギー「市民革命」と「産業革命」—その自由主義体制の経済的基礎—」岡田与好編『近代革命の研究 下』東京大学出版会, 1973年, 1-36頁。
- 石部尚登『ベルギーの言語政策 方言と公用語』大阪大学出版会, 2011年。
- _____, 「言語・教育政策」津田由美子, 松尾秀哉, 正躰朝香, 日野愛郎編著『現代ベルギーの政治—連邦化後の20年—』ミネルヴァ書房, 2018年, 117-136頁。
- 井内千紗「多文化都市ブリュッセルと向き合う「フラーンデレン」の舞台芸術」岩本和子, 井内千紗編著『ベルギーの「移民」社会と文化—新たな文化的多層性に向けて—』松籟社, 2021年, 151-176頁。
- 岩本和子『周縁の文学—ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷—』松籟社, 2007年。
- _____, 石部尚登編著『「ベルギー」とは何か?—アイデンティティの多層性—』松籟社, 2013年。
- 奥西孝至「ベルギーの工業化」岡田泰男編著『西洋経済史 基本経済学シリーズ第5巻』八千代出版, 1996年。
- 小沢弘明「新自由主義時代の自由主義研究」『人民の歴史学』第174号, 東京歴史科学研究会, 2007年, 13-20頁。
- 梶田孝道『エスニシティと社会変動』有信堂高文社, 1988年。
- 河崎靖, クレインス・フレデリック『低地諸国(オランダ・ベルギー)の言語事情』大学書林, 2002年。
- 河原温「ベルギー・ルクセンブルク」森田安一編『新版世界各国史14 スイス・ベネルクス史』山川出版社, 1998年, 339-415頁。
- 清宮四郎訳『憲法正文シリーズ3 ベルギー国憲法』有斐閣, 1955年。
- 栗原福也『ベネルクス現代史』山川出版社, 1982年。
- コッカ, ユルゲン「市民層と市民社会—ヨーロッパの発展とドイツの特質—」ユルゲン・コッカ編著, 望田幸男監訳『国際比較・近代ドイツの市民 心性・文化・政治』ミネルヴァ書房, 2000年, 5-54頁 [Jürgen Kocka, Bürgertum im 19. Jahrhundert: Deutschland im Europäischen Vergleich. Band 1, Deutscher

- Taschenbuch Verlag, München 1988.]。
- 作内由子「柱状化社会」津田由美子, 松尾秀哉, 正躰朝香, 日野愛郎編著『現代ベルギーの政治—連邦化後の20年—』ミネルヴァ書房, 2018年, 77-96頁。
- 佐々木克己『歴史家アンリ・ビレンヌの生涯』創文社, 1981年。
- 吹田映子「ウージェーヌ・ラールマンズが描いた19世紀末の「移民」と「郊外」」岩本和子, 井内千紗編著『ベルギーの「移民」社会と文化—新たな文化的多層性に向けて—』松籟社, 2021年。
- 津田由美子「ベルギーの柱状化に関する一考察」姫路独協大学法学部『姫路法学』31・32号, 2001年, 297-336頁。
- _____「連邦化をめぐる政治史」津田由美子, 松尾秀哉, 正躰朝香, 日野愛郎編著『現代ベルギーの政治—連邦化後の20年—』ミネルヴァ書房, 2018年, 117-136頁。
- デュモン, ジョルジュ=アンリ著, 村上直久訳『ベルギー史』白水社, 1997 [Georges-Henri Dumont, *La Belgique* (Collection Que Sais-Je N° 319), Presses Universitaires de France, Paris, 1991.]。
- 日野愛郎「政党政治のダイナミズム」津田由美子, 松尾秀哉, 正躰朝香, 日野愛郎編著『現代ベルギーの政治—連邦化後の20年—』ミネルヴァ書房, 2018年, 117-136頁。
- 福田宏『身体の国民化—多極化するチェコ社会と体操運動』北海道大学出版会, 2006年。
- フロッホ, ミロスラフ「国民運動における市民層 ヨーロッパ的比較」ユルゲン・コッカ編著, 望田幸男監訳『国際比較・近代ドイツの市民 心性・文化・政治』ミネルヴァ書房, 2000年, 325-341頁 [Jürgen Kocka, *Bürgertum im 19. Jahrhundert: Deutschland im Europäischen Vergleich*. Band 1, Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1988.]。
- ホブズボーム, エリック・J著, 安川悦子・水田洋訳『市民革命と産業革命 二重革命の時代』岩波書店, 1868年 [Eric J. Hobsbawm, *The Age of Revolution: Europe 1789-1848*, Weidenfeld and Nicolaon, London, 1962.]。
- _____, 浜林正夫・嶋田耕也・庄司信訳『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店, 2001年 [Eric J. Hobsbawm, *Nation and Nationalism since 1780: Programme, Myth, Reality*, Cambridge University Press, London, 1990.]。
- _____, 柳父園近・長野聰・荒関めぐみ訳『資本の時代1 1848-1875』みすず書房, 2018年 [Eric J. Hobsbawm, *The Age of Capital 1848-1875*, Weidenfeld and Nicolaon, London, 1975.]。
- _____, 松尾太郎・山崎清訳『資本の時代2 1848-1875』みすず書房, 2018年 [Eric J. Hobsbawm, *The Age of Capital 1848-1875*, Weidenfeld and Nicolaon, London, 1975.]。
- ホフマン, シュテファン=ルードヴィヒ, 山本秀行訳『市民結社と民主主義 1750 - 1914』岩波書店, 2009年 [Stefan-Ludwig Hoffmann, *Civil Society, 1750-1914*, Palgrave Macmillan, London, 2006.]。
- 松尾秀哉『ベルギー分裂危機 その政治的起源』明石書店, 2007年。
- _____『物語 ベルギーの歴史』中央公論社, 2014年。
- 三竹直哉「統合の最後の砦—ベルギーの王制」駒澤大学法学会『法学論集』59号, 1993年。
- _____「ベルギーにおける言語政策と統治機構の再編(一)」『政治学論集』41号, 1995年, 37-57頁。
- モーツキン, ガブリエル「世俗化・市民層・知識人—フランス・ドイツ比較—」ユルゲン・コッカ編著, 望田幸男監訳『国際比較・近代ドイツの市民 心性・文化・政治』ミネルヴァ書房, 2000年, 167-189頁 [Jürgen Kocka, *Bürgertum im 19. Jahrhundert: Deutschland im Europäischen Vergleich*. Band 1, Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1988.]。

注

- (1) Maarten Van Ginderachter, *The Everyday Nationalism of Workers: a Social History of Modern Belgium*, California, 2019, p. 12.

- (2) 現東西フランドレン州におおよそ相当。最盛期には現ワロニー地域、オランダ南部、フランス北部まで領土が広がっていた。
- (3) 梶田孝道『エスニシティと社会変動』有信堂高文社、1988年、241頁。
- (4) 梶田『エスニシティと社会変動』、241頁。
- (5) 柱状化とはもともとオランダ社会の現象に着目したレイブハルトによって提唱されるようになった概念であり、オランダ社会とベルギー社会が類似しているという考えからベルギーの議論にもこの概念が用いられるようになった。ベルギーの「柱状化」については、作内由子「柱状化社会」津田由美子、松尾秀哉、正舂朝香、日野愛郎編著『現代ベルギーの政治—連邦化後の20年—』ミネルヴァ書房、2018年、77-96頁。Arend Lijphart, "the Belgian example of cultural coexistence", in: Arend Lijphart (ed.), *Conflict and Coexistence in Belgium*, Berkley, 1981, pp.1-12を参照。
- (6) 作内「柱状化社会」、77頁。
- (7) 政治学者の津田由美子は柱状化論を受けて1870年代から第一次世界大戦前までのベルギー社会に着目し、いかにして柱状化がはじまったのかを階層ごとの視点から分析した。この論のなかで津田は、当時のカトリック勢力とフランドレン運動の親和性に言及している。津田由美子「ベルギーの柱状化に関する一考察」姫路独協大学法学部『姫路法学』31・32号、2001年、297 - 336頁。
- (8) 詳しくは以下の研究を参照。Val Lorwin, "Belgium: Region, Class and Language in National Politics", in: Robert A. Dahl, *Political Oppositions in Western Democracies*, Yale University Press, London, pp. 147-187. 三竹直哉「ベルギーにおける言語政策と統治機構の再編(一)」『政治学論集』41号、1995年、37 - 57頁。石部尚登『ベルギーの言語政策 方言と公用語』大阪大学出版会、2011年。
- (9) Miroslav Hroch, *Social Preconditions of National Revival in Europe*, Columbia University Press, New York, 2000. ミロスラフ・フロホ「国民運動における市民層—ヨーロッパ的比較」ユルゲン＝コッカ編著、望田幸男監訳『Minerva 西洋史ライブラリー 国際比較・近代ドイツの市民—心性・文化・政治』ミネルヴァ書房、2000年、325-341頁。
- (10) 以下、各段階の定義は、福田宏『身体の国民化—多極化するチェコ社会と体操運動』北海道大学出版会、2006年、21頁を参考にまとめた。
- (11) Hroch, *Social Preconditions of National Revival in Europe*, pp. 108-109.
- (12) Lode Wils, *Honderd Jaar Vlaamse beweging: Geschiedenis van het Davidsfonds*, 3 vols., Leuven, 1977-1989.
- (13) Romain Van Eenoo, "Honderd jaar Vlaamse Beweging I ", *Ons Erfdeel*, Jaargang 22, 1979, pp. 785-788.
- (14) Marcel Bots e.a., *Het Willemsfonds van 1851 tot 1914*, Bijdragem Museum, van de Vlaamse Sociale Strijd, 9, Gent, 1993.
- (15) 河原温「ベルギー・ルクセンブルク」森田安一編『新版世界各国史14 スイス・ベネルクス史』山川出版社、1998年、382頁。
- (16) 1830年11月に行われた初の国政選挙では、選挙権は25歳以上の男子で直接税を最低基準(年20グルデンから100グルデンの範囲内。選挙法で市町村別に定める。)以上納めるものに限定されていた。
- (17) 三竹直哉「統合最後の砦—ベルギーの王制」駒沢大学法学会『法学論集』59号、1993年、3頁。
- (18) 1879年、フレール・オルバン内閣の下で、「統一同盟」時代に自由主義派とカトリック派の妥協として制定されていた学校法が改正され、国家による公教育の把握と宗教教育の禁止を趣旨とする初等教育法(フムベーク法)が制定された。
- (19) 自由貿易政策の結果生じたアメリカや東欧からの安価な穀物の流入は、フランドレン農村の脆弱な産業構造に大打撃を与え、農村から都市への人口流出が起こった。
- (20) Aristide Zolberg, "The Making of Flemings and Waloons", *Journal of Interdisciplinary History*, vol.2, The MIT Press 1974, p.184.
- (21) ベンジャミン・シーボーム・ロウントゥリーが10歳以上の労働者13270人を対象に、1911年前後に行っ

- た非識字率の調査では、全体で非識字率は21.4%、フランス語圏の自治体では17.34%だったのに対し、フランドレン語圏の自治体では34.69%と他より高い数字となった。B. Seebohm Rowntree, *Land and Labour: Lessons from Belgium*, London, 1911, pp. 263-364.
- (22) Zolberg, "The Making of Flemings and Waloons", p. 200.
- (23) Luc Huyse, "Political Conflict in Bicultural Belgium", in: Arend Lijphart (ed.), *Conflict and Coexistence in Belgium*, University of California, Berkley, 1981, p.109.
- (24) Zolberg, "The Making of Flemings and Waloons", p. 204.
- (25) Hroch, *Social Preconditions of National Revival in Europe*, pp. 114-116.
- (26) 栗原福也『ベネルクス現代史』山川出版社, 1982年, 126頁。
- (27) ヴァイルステケはウィレムス基金執行部において, 1862年から1880年にかけて書記を, 1883年から1896年にかけて会長を務めた。
- (28) Paul Fredericq, "Uit de Geschiedenis van Willems-fonds en Davids-fonds", Gent, 1909, p. 17. *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, Gent, 1868, p. x vii.
- (29) Paul Fredericq, "Uit de Geschiedenis van Willems-fonds en Davids-fonds", p. 24-25.
- (30) *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, Gent, 1868, p. LXXI.
- (31) Bart D'Hondt, Geschiedenis van het Brugse Willemsfonds (1872-2000), in: Juul Hannes (red.), *De Charme van de rede. Huldeboek Albert Claes*, Gent, 2004, pp. 163-218.
- (32) アントウェルペンの織布工の平均日給は1855年に0.48フランであった。これはライ麦パン4.833kgの価格に相当する。また、アントウェルペンで増加していた日雇労働者の平均賃金は同じく1855年に0.41フランほどであった。上記の平均賃金はCatharina Lis, *Social Change and the Labouring Poor: Antwerp, 1770-1860*, Yale University Press, New Haven, 1986, p. 176の統計に基づき、スタイヴェルからフランに置き換えて算出した。
- (33) Harry Van Velthoven, "Het Willemsfonds in een veranderende samenleving", in: Harry Van Velthoven en Jeffrey Tyssense, *Vlaamsch van taal, van kunst en zin: 150 jaar Willemsfonds (1851-2001)*, Ghent, 2001, p. 21.
- (34) 井内千紗「多文化都市ブリュッセルと向き合う「フランドレン」の舞台芸術」, 岩本和子, 井内千紗編著『ベルギーの「移民」社会と文化——新たな文化的多層性に向けて——』松籟社, 2021年, 151-176頁。
- (35) 例えば、ブルッヘ支部の事例はBart D'Hondt, *Geschiedenis van het Brugse Willemsfonds (1872-2000)*, pp. 163-218を参照。
- (36) Marcel Bots, Georges Declercq, "Willemsfonds", NEVB online. <https://nevb.be/wiki/Willemsfonds> (2023年5月4日最終閲覧)
NEVB onlineとはDe Schryver, Reginald, Bruno DeWever, Gaston Durnez, Lieve Gevers, Pieter Van Hees en Machteld De Metsenaere, *Nieuwe encyclopedie van de Vlaamse Beweging*, Lannoo, Tielt, 1998.のオンライン版である。
- (37) 16世紀のネーデルラント地方において、スペインの圧政に対抗して同盟した貴族の呼称。自由主義派は「乞食党」を自由の闘士として称賛し、自らと重ね合わせた。一方でカトリック派にとってはカトリック教会を抑圧した反カトリック勢力であり、批判の対象であった。
- (38) Wills, *Honderd Jaar Vlaamse beweging*, p.50-51.
- (39) Fredericq, "Uit de Geschiedenis van Willems-fonds en Davids-fonds", p. 17.
- (40) ウィレムス基金では、1875年に6、1880年に25の支部が設置されていた。Fredericq, "Uit de Geschiedenis van Willems-fonds en Davids-fonds", p. 17.
- (41) Fredericq, "Uit de Geschiedenis van Willems-fonds en Davids-fonds", p. 18.
- (42) 1875年1月18日に公表された回状で示された、ダヴィッド基金の設立目的である。文言はWills, *Honderd Jaar Vlaamse beweging*, p. 69参照。

- (43) *Jaarboek van Davids-Fonds voor 1888*, Leuven, 1889, p. 5.
- (44) フレデリックは1887年から1920年までウィレムス基金ヘント支部の会長を務めた。彼は1909年に自由主義者の立場からウィレムス基金とダヴィッド基金の歴史に関する著作を発表している。
- (45) Fredericq, "Uit de Geschiedenis van Willems-fonds en Davids-fonds", p. 11.
- (46) Wills, *Honderd Jaar Vlaamse beweging*, p. 61.
- (47) Fredericq, "Uit de Geschiedenis van Willems-fonds en Davids-fonds", p. 15, 24.
- (48) *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, pp. 142-143.
- (49) *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, pp. 133-137.
- (50) *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, pp. 138-141.
- (51) *Jaarboek van Davids-Fonds voor 1888*, pp. 146-147.
- (52) キリスト教社会運動では、国家は工場労働者や資本家が属する「工業身分」、地主や農業労働者が属する「農業身分」等といった諸「身分」の連合体とみなされた。彼らは自由主義がもたらす階層化に対して、「身分」を通じて統合しようと試みたのである。ここでいう「コーポラティズム秩序」とは、こうした階級という認識に対抗するための、カトリック特有の有機体的社会観に基づく「身分」秩序のことをいう。小沢弘明「新自由主義時代の自由主義研究」『人民の歴史学』第174号、東京歴史科学研究会、2007年、17頁。
- (53) 津田「ベルギーの柱状化に関する考察」、332頁。
- (54) 津田「ベルギーの柱状化に関する考察」、315頁。
- (55) *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, pp. 186, 190-191, 197.
- (56) Julius Vuylsteke, 'Introduction' to *A Brief Statistical Description of Belgium*. 英語訳は Theo Hermans, (ed.), *The Flemish Movement: A Documentary History 1780-1990*, the Athlone Press, London, 1992, pp. 141-147 に収録。
- (57) Van Ginderachter, *The Everyday Nationalism of Workers*, p. 89.
- (58) *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, pp. 179-180.
- (59) *Jaarboek van Willems-Fonds voor 1869*, pp. 202-217.
- (60) *Jaarboek van Davids-Fonds voor 1888*, pp. 72-75.
- (61) ただし、この文章の書き手はフランデレン地域の言語としての「フランデレン語」とオランダとの正書法共有がなされた「ネーデルラント語」という言葉を明確に使い分けていない。
- (62) *Jaarboek van Davids-Fonds voor 1888*, pp. 99-100.
- (63) フランデレン地域における正書法の制定方法をめぐる論争のこと。既にオランダにおいて存在していた標準語の規範を採用すべきと主張した言語統合主義者 (integrationalisten) と、ベルギー国内におけるフランデレンに固有の標準語化を主張した言語分離主義者 (particularisten) の間で論争が繰り返された。最終的に前者の意見が採用され、オランダとの正書法の共有がはかられることになる。
- (64) 岩本和子『周縁の文学—ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』松籟社、2007年。
- (65) Piet Couttenier, "National Imagery in 19th Century Flemish Literature", in: Kas Depez and Louis Vos (ed.), *Nationalism in Belgium: shifting identities, 1780-1995*, Macmillan Press, London, 1998, p. 51.
- (66) 正確にはタイトルは『フランドルと諸国におけるウーレンシュビーゲルとラム・フットザックの伝説および英雄的で楽しくまた華々しい冒険の数々 (*la Légende et les aventures héroïques et glorieuses d' Utlenspiegel et de LammeGoedzak au pays de Flandres et ailleurs*)』。「最初のベルギー (フランス語) 文学」とみなされる。1867年発行。ド・コステルは、ドイツ民衆譚をもとに、舞台を16世紀ネーデルラントに移し、スペインからの祖国解放をめざす闘士の物語を創出した。
- (67) 1856年に発行を開始した週刊誌。ド・コステルはこの雑誌に、政治やモラルを題材にユーモアあふれる記事を書いた。岩本『周縁の文学』、64頁。
- (68) 原文がフランス語であるため、以下、言語名はあえてフランス語表記を使用する。
- (69) Charles De Coster, "Spectacle Européen ;Flamands et Wallons, *Uylenspiegel*, 27 janvier 1861. 訳出の

19世紀後半ベルギー北部地域における地域・国民意識の形成

際には、岩本『周縁の文学』, 80頁も参考にした。

The Making of Regional and National Identity in Late-Nineteenth-Century Northern Belgium: The “Competitive Collaboration” of the Flemish Cultural Organizations

HIROTA Risa

This article examines the development of the Belgian-Flemish movement between the 1860s and the 1880s from the perspective of nationalism. Investigating the activities of the *Willemsfonds* and the *Dauidsfonds*, the two societies that led the movement, sheds light on how the leaders of each organization aimed to shape a regional and national identity.

At the time of Belgium's founding, neither the ideas of *Belgique* nor *Vlaanderen* were self-evident. In the nineteenth century, the Flemish movement pursued linguistic equality and created a regional identity throughout Flanders. However, the process differed from one body to another. The two cultural organizations competed in the pursuit of Flemish regional identity, while belonging respectively to the liberal and Catholic factions. In other words, by examining both societies, we can highlight the “competitive collaboration” between them within the Flemish movement.

In Belgium in the mid-nineteenth century, a liberal state system was established in which political power was concentrated in the hands of the bourgeois and landowner classes, and rapid industrialization caused various social problems based on class and regional disparities. To solve these problems, Catholics and socialists each conceived of their social groups and sought to expand the Flemish movement, which had been limited to the urban middle class. The *Willemsfonds* and the *Dauidsfonds* became the cultural cores of the movement. Both organizations had some commonalities that transcended party lines. First, the members discussed language issues in relation to various social issues. They sought to expand the movement by regarding the language issue as a regional rather than a class interest. Second, under the influence of Romanticism, the members formed an idealized image of the Flemish city and countryside. The *Flamingants* claimed the constructed “Flemishness” as a Belgian characteristic and it could be comparable to the French culture, thereby increasing the significance of the Flemish movement in the country. On the other hand, there were differences in the logic of fulfilling Flamingantism between the two groups. The liberal *Willemsfonds* focused on solving social problems using secular public authorities and aimed to foster modern autonomous citizens by providing Enlightenment-based education to the masses. The Catholic *Dauidsfonds*, on the other hand, was part of the Christian Social Movement and envisioned the solution of social problems by church authorities. It also considered the Flemish region the inheritor of the organic rural communities in the medieval era, as an important element of Belgium, and aimed to nurture an organic people through patronage-oriented education by the clergy. In other words, the liberal and Catholic groups in the Flemish movement were linked to the local communities by their logic, while setting forth the common goal of “achieving linguistic equality”.

Keywords: Belgium, Flanders, nationalism, cultural organizations.